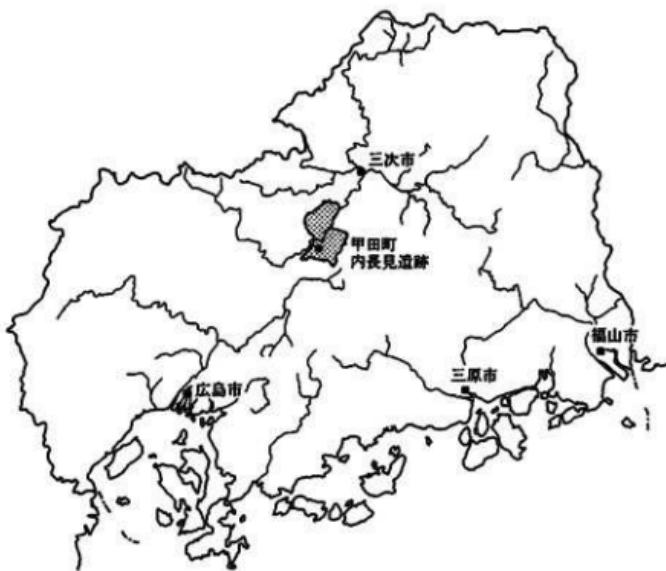


内 長 見 遺 跡

1992

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

内長見遺跡



財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

- 1 本書は、平成2（1990）年度に実施した土地改良総合整備事業に伴う内長見遺跡（高田郡甲田町内長見3565-4ほか）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、甲田町から委託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 発掘調査は田辺辰久、牧野亮、大上裕士、高下洋一（現跡広島市歴史科学教育事業団）が担当した。
- 4 造構の実測・写真撮影は上記の者が担当した。出土遺物の整理・実測、図面の製図等は、牧野・大上が担当した。遺物の写真撮影は、大上が行った。
- 5 本書の執筆・編集は、大上が行った。
- 6 造構は一連番号を付し、その前にSA：櫛、SB：住居・建物跡、SD：溝、SK：土壙・木棺墓、SX：祭祀造構の記号を用いた。
- 7 本文中に用いた方位は第1～3図を除いてすべて磁北である。
- 8 第1図の「内長見遺跡周辺遺跡分布図」は、建設省国土地理院発行の1/50,000地形図（八重、三次、可部、乃美）を用いた。
第2図の「内長見遺跡周辺地形図」は、広島県甲田町が作成した「甲田町1:10,000地形図その2」を用いた。
- 9 第3図の「調査区位置図」は、広島県土地改良事業団体連合会が作成した「土地改良総合整備事業 高田郡甲田町谷上谷地区 計画平面図1」を加筆修正して用いた。
- 10 本文中の造構の新旧関係は「→」で示し、（古）→（新）とする。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに.....	(1)
第Ⅱ章 位置と環境.....	(2)
第Ⅲ章 調査の概要.....	(6)
第Ⅳ章 造構と遺物	
(1) A区.....	(8)
(2) B区.....	(11)
(3) C区.....	(14)
(4) D区.....	(15)
(5) E区.....	(16)
(6) F区.....	(18)
第Ⅴ章 まとめ.....	(62)

挿図目次

第1図 内長見遺跡周辺遺跡分布図 (1 : 50,000)	(3)
第2図 内長見遺跡周辺地形図 (1 : 10,000)	(5)
第3図 調査区位置図 (1 : 2,000)	(7)
第4図 A区造構配置図 (1 : 300)	(8)
第5図 SK 1実測図 (1 : 30)	(9)
第6図 SX 1実測図 (1 : 20)	(10)
第7図 SX 1出土遺物実測図 (1 : 4)	(10)
第8図 B区造構配置図 (1 : 300)	(11)
第9図 SA 1, SB 1・2実測図 (1 : 60)	(12)
第10図 SD 1, SK 2土層断面図 (1 : 80)	(13)
第11図 C区造構配置図 (1 : 300)	(14)
第12図 D区造構配置図 (1 : 300)	(15)
第13図 D区内出土遺物実測図 (1 : 3)	(15)
第14図 E区造構配置図 (1 : 300)	(16)

第15図	S B 3・4実測図 (1:60)	(17)
第16図	F区遺構配置図 (1:300)	折込み
第17図	S B 5実測図 (1:60)	(19)
第18図	S B 6実測図 (1:60)	(20)
第19図	S B 6出土遺物実測図 (1:3)	(22)
第20図	S B 7~9実測図 (1:60)	(24)
第21図	S B 9出土遺物実測図 (1:3)	(26)
第22図	S B 10・11実測図 (1:60)	(28)
第23図	S B 10・11出土遺物実測図 (1) (1:3)	(31)
第24図	S B 10・11出土遺物実測図 (2) (1:2, 1:3)	(32)
第25図	S B 12実測図 (1:60)	(33)
第26図	S B 13実測図 (1:60)	(34)
第27図	S B 13出土遺物実測図 (1:3)	(34)
第28図	S B 14実測図 (1:60)	(35)
第29図	S B 15実測図 (1:30, 1:60)	(36)
第30図	S B 15出土遺物実測図 (1:3)	(37)
第31図	S B 16実測図 (1:60)	(39)
第32図	S B 16出土遺物実測図 (1:3)	(39)
第33図	S B 17実測図 (1:60)	(40)
第34図	S B 17出土遺物実測図 (1:3, 1:6)	(41)
第35図	S B 18実測図 (1:60)	(43)
第36図	S B 18出土遺物実測図 (1:3)	(44)
第37図	S B 19実測図 (1:30, 1:60)	(46)
第38図	S B 20実測図 (1:60)	(47)
第39図	S B 21~23実測図 (1:60)	(48)
第40図	S B 22・23出土遺物実測図 (1:3)	(49)
第41図	S B 24, SK 6実測図 (1:60)	(50)
第42図	S B 25実測図 (1:80)	(51)
第43図	S B 26実測図 (1:60)	(52)
第44図	SK 7実測図 (1:30)	(53)
第45図	SK 7出土遺物実測図 (1:3)	(53)
第46図	SK 5・8実測図 (1:60)	(54)

第47図	S K 9・12実測図 (1 : 60)	(55)
第48図	ピット1~5出土遺物実測図 (1 : 3)	(57)
第49図	F区内出土遺物実測図 (1) (1 : 3)	(59)
第50図	F区内出土遺物実測図 (2) (2 : 3, 1 : 3)	(61)

図 版 目 次

図版 1	①内長見遺跡空中写真 ②同上	図版11 ①S B10・11 ②S B10遺物出土状況
図版 2	①内長見遺跡遠景 ②A区全景 ③同左	図版12 ①S B12, S K10・11 ②S B13
図版 3	①S K 1検出状況 ②同上完掘	図版13 ①S B14 ②S B15
図版 4	①S X 1周辺遺構 ②S X 1検出状況 ③同左完掘	図版14 ①S B16 ②S B17
図版 5	①B区全景 ②S A 1, S B 1・2	図版15 ①S B18・19 ②S B18遺物出土状況
図版 6	①S D 1 ②C区全景	図版16 ①S B21~23 ②S B22遺物出土状況 ③S B23遺物出土状況
図版 7	①D区全景 ②同左 ③E区全景	図版17 ①S B25 ②S B26
図版 8	①F区全景 ②同上	図版18 ①S K 8・9 ②現地見学会風景
図版 9	①S B 5 ②S B 6	図版19 出土遺物 (1)
図版10	①S B 7~9, S K 3 ②S B 9遺物出土状況	図版20 出土遺物 (2) 図版21 出土遺物 (3) 図版22 出土遺物 (4) 図版23 出土遺物 (5) 図版24 出土遺物 (6)

第Ⅰ章 はじめに

高田郡甲田町（以下「甲田町」という。）は、平成元年度から甲田町大字下小原において、土地改良総合整備事業を実施している。

本事業は、農地、用排水路、道路、暗渠排水等の整備を総合的に実施し、農地の集団化と、農業用大型機械の導入・共同利用を進めることにより、農地を生産性の高い条件に整備することを目的とする。そして、ますます多様化する食糧需給に即応できる生産体制の確立と、農業経営の安定化を図るものである。

甲田町は、昭和63年7月、広島県教育委員会（以下「県教委」という。）へ、事業地内（開発面積約30ha）の埋蔵文化財の有無及びその取扱いについて照会を行った。これに対して県教委は平成元年3月、事業地内の1か所について試掘調査が必要である旨を回答し、同年5月、試掘調査を行った。その結果、古墳時代の集落跡と思われる内長見遺跡を確認した。その範囲は約19,000m²におよぶと推定された。甲田町と県教委は、この遺跡の取扱いについて協議を重ね、道路、用排水路、削平等により現状保存が困難な2,940m²について発掘調査を行い、記録保存の措置をとることになった。

甲田町は、平成元年10月、財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）へ発掘調査を依頼した。センターはこの依頼を受けて、平成2年4月9日から発掘調査を開始し、同年9月8日に終了した。また9月8日には、センターと甲田町教育委員会の共催で遺跡見学会を開催し、地元住民を中心に多数の参加を得た。

最後に、発掘調査にあたっては、県教委の指導を得るとともに、甲田町教育委員会、甲田町農業開発課をはじめ地元の方々から多大な御協力を得た。また石器石材の鑑定については、柴田喜太郎氏に御教示頂いた。記して謝意を表したい。

第Ⅱ章 位置と環境

内長見遺跡は、広島県高田郡甲田町大字下小原3564-4ほかに所在する。本遺跡のある高田郡甲田町は、広島市から三次市を経て山陰にいたる道が通っており、古今をとおして交通の要衝である。本町は広島県の地形地域区分では高田高原に属している。高田高原は、東側の白木山山塊で世羅・賀茂台地と、西側の海見山山塊で豊平高原と隔てられ、北の三次盆地、北西の大朝盆地に接している。甲田町はこの高田高原の東端にあたるが、町の北部は三次盆地に含まれ、町の東部は白木山山塊に含まれる。山県郡大朝町に源を発する可愛川（江の川）は、甲田町内で戸島川と合流する。この二河川は長い年月の間に高田高原面を約100m浸食し、向原から三次にいたる直線的な谷を形成した。戸島川を合わせた可愛川は、甲田町のほぼ中央を本村川や大土川などの支流を集めて川幅を広げ、緩やかに蛇行しながら北流する。甲田町の市街地は主に可愛川とその支流の氾濫原上に広がっている。可愛川や戸島川の東岸には、なだらかな山麓傾斜面が続き、名産「高田梨」などの果樹園が営まれている。

本遺跡は戸島川の西岸に位置する。北西側には「城の山（標高408m）」と地元で呼ばれる山塊がそびえ、遺跡はこの山麓に形成された扇状地上に立地している。遺跡の南側にある長見山（標高238m）は、遺跡南西の山から北東に延びた尾根の先端部が分断されたもので、南からの強風を遮るような役割を果たしている。現在遺跡の周囲は、水田あるいは野菜畑、果樹園と広く農業が営まれる豊かな土地である。

次に甲田町内の遺跡を概観する。旧石器・縄文時代の遺跡は確認されていない。弥生時代の遺跡は、翁ヶ平遺跡がある。向原町との境に位置する翁ヶ平山中腹から、弥生時代中期の壺・甕が出土している。水田からの比高が約100mと高所にあり、巨石の周囲から遺物が出土していることから、祭祀遺跡と思われる。

古墳時代になると遺跡数が急増するもののほとんどが古墳である。主に、可愛川・戸島川東岸や山田川・大土川の両岸の丘陵に、群をなして点在している。いずれも數基の古墳で構成された古墳群であるが、なかには前方後円墳や横穴を含む18基からなる井才田古墳群や、20基からなる恩地古墳群といった規模の大きな古墳群もみられる。これらの古墳群は、河川に沿って分布することから、それぞれの河川に隣接して生産基盤を置く、個々の集団の墓地とみることができる。しかし発掘調査が行われていないため時期など詳細は不明である。発掘調査が行われた古墳では、谷上第1号古墳と法恩寺南古墳がある。谷上第



- | | | | |
|--------------|-------------|---------------|-------------|
| 1. 内長見遺跡 | 2. 翁ヶ平遺跡 | 3. 平佐八幡神社裏古墳群 | 4. 寺祖古墳群 |
| 5. 大山神社西古墳群 | 6. 高林坊古墳群 | 7. 井才田古墳群 | 8. 花木古墳群 |
| 9. 井才田南古墳群 | 10. 法恩寺古墳群 | 11. 法恩寺南古墳 | 12. 恩地古墳群 |
| 13. 尾津谷西古墳群 | 14. 尾津谷東古墳群 | 15. 高地位古墳群 | 16. 荒神古墳 |
| 17. 正学古墳群 | 18. 下追古墳群 | 19. 建光古墳群 | 20. 上追古墳群 |
| 21. 尾首古墳群 | 22. 立岩古墳群 | 23. 高屋古墳群 | 24. 谷上第1号古墳 |
| 25. 内長見古墳群 | 26. 中山田古墳群 | 27. 上山田古墳群 | 28. 池内東古墳群 |
| 29. 上山田西古墳群 | 30. 四軒屋古墳群 | 31. 植原古墳群 | 32. 国司池の内遺跡 |
| 33. 国司池の内古墳群 | 34. 五箇城跡 | 35. 清原城跡 | 36. 蓋ヶ城跡 |
| 37. 長見山城跡 | 38. 中山城跡 | 39. 塩屋城跡 | 40. 長谷木城跡 |
| 41. 郡山城跡 | 42. 天神山城跡 | 43. 植原山城跡 | 44. 高塚山城跡 |
| 45. 吉常ヶ城跡 | 46. 田淵ヶ城跡 | 47. 山田積石塚 | |

第1図 内長見遺跡周辺遺跡分布図 (1 : 50,000)

1号古墳は、本遺跡の北東約300mにあり、昭和55年に発掘調査が行われた。横穴式石室を埋葬施設としており、石室床面に須恵器を敷き詰めたいわゆる土器床を持っていたと考えられる。また法恩寺南古墳は、可愛川と戸島川の合流地点東側の丘陵にあり、昭和58年に発掘調査を行った。横穴式石室を有し、谷上第1号古墳と同様に石室床面に須恵器を敷いていた。石室内からは、鉄刀・鉄鎌・馬具などの鉄製品や耳環、勾玉・管玉などといった玉類、格子目状の鋸歯文を施した滑石製紡錘車など豊富な遺物が出土した。

甲田町内では、現在まで古墳時代の集落跡や住居跡などは確認されていなかったが、甲田町大字下小原字祇園追2号遺跡で行われている発掘調査において、古墳時代後期～古代の掘立柱建物跡や竪穴住居跡などが検出され、土師器や須恵器などの遺物が出土している。(平成3年度甲田町教育委員会調査)

古代の遺跡は、前述のとおり祇園追2号遺跡で掘立柱建物跡が検出されている。また、現在の甲田町字高田原に郡衙があったと推定されていることから、今後この地域においても確認される可能性がある。

中世になると、毛利氏の居城であった高田郡吉田町郡山城跡に隣接した地域であるために、毛利氏に関連した城跡が点在する。本遺跡の南約200mにある長見山に築かれていた長見山城跡は、毛利氏の重臣であった渡辺氏の居城とされ、山麓には居館があったと言われている。また、本遺跡の北西約1kmには、三上氏の居城であった蓋ヶ城跡がある。町内にはこのほかにも、五龍城跡(宍戸氏)、清源城跡(麻原氏)、塩屋城跡(栗屋氏)などがある。中世の墓はその所在が多く知られているが、発掘調査を行った例は少ない。そのなかで山田横石塚は、本遺跡の南西約700mにあり、昭和46年に発掘調査が行われた。横石塚全体の規模は不明であるが、備前焼の叢骨器と多数の土師質土器などが出土した。16世紀後半頃、この地域に勢力を張った小南氏に関連すると推定される。

参考文献

- 高田郡史編纂委員会「高田郡史」(上巻) 昭和47(1972)年
甲田町文化財保護委員会「山田横石塚発掘調査報告」昭和47(1972)年
広島県「広島県史」(地誌編) 昭和52(1977)年
新人物往来社「日本城郭大系」第13巻(広島・岡山) 昭和55(1980)年
広島県教育委員会・甲田町教育委員会「谷上第1号古墳緊急発掘調査概報」昭和58(1983)年
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「法恩寺南古墳」昭和59(1984)年



第2図 内長見造跡周辺地形図（1：10,000）（アミ目は造跡の範囲）

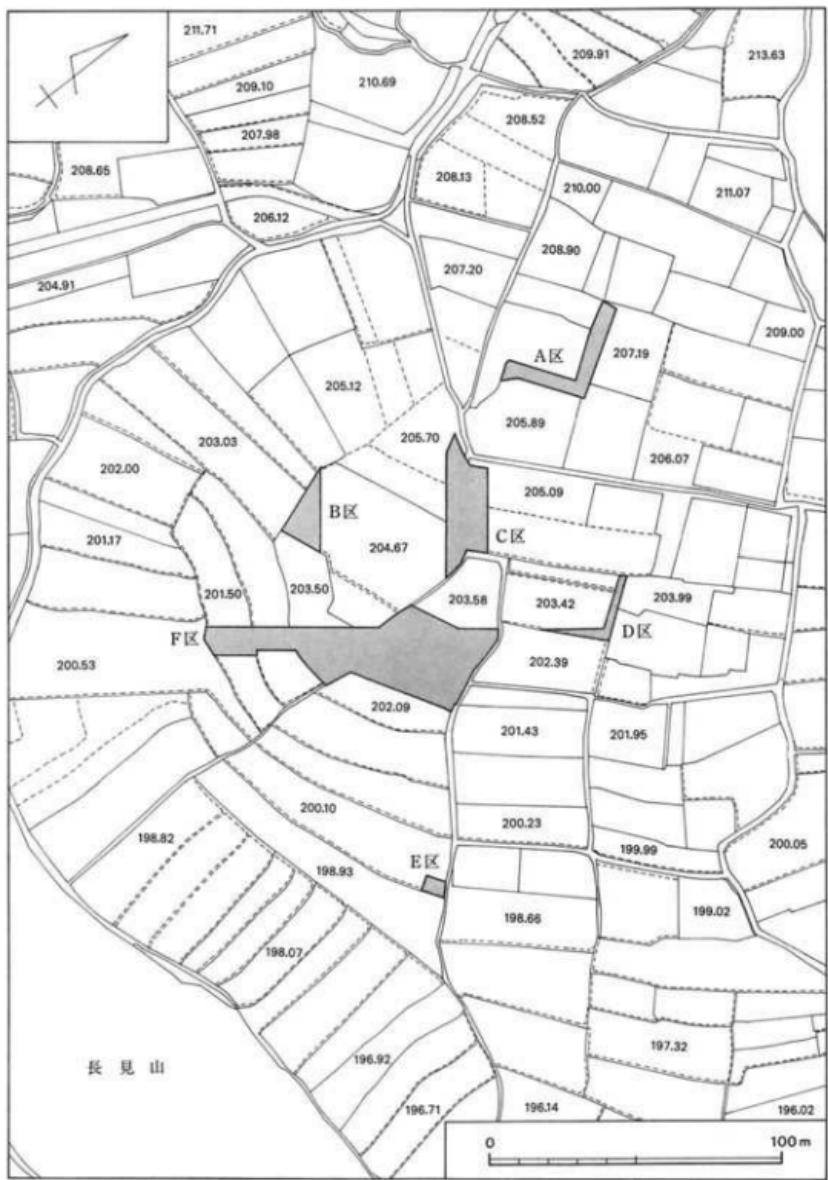
第Ⅲ章 調査の概要

県教委の行った試掘調査では、8か所のトレンチで住居跡状遺構・段状遺構・溝状遺構・柱穴などが確認され、土師器・須恵器・土師質土器が出土している。この調査結果をもとに遺跡の範囲が設定されたが、そのなかでは場整備により削平され消滅する部分や、道路となる部分が発掘調査の対象となった。このためL字状・三角形といった不規則な形で面積も極端に違う6か所の調査区が設定された。これを便宜上最も北東にある調査区からA～D区とし、最も南にある調査区をE区、最も広い調査区をF区とした（第3図）。

調査は各区とも、あらかじめ想定された黒色土・黒褐色土からなる遺物包含層上面まで重機で土砂を取り除いた後、順次遺構検出・精査を行った。耕作地であったり、人家に隣接していたりで各区とも搅乱や削平が著しく、全体的に遺構の残りは良くない。

調査の結果、各調査区から検出した遺構と出土した遺物は以下のとおりである。

- (1) A区 土壙1基、祭祀遺構1基とピット多数を検出した。遺物はSX1から土師質土器（鍋）が出土した。
- (2) B区 横1条、掘立柱建物跡2棟、溝1条、土壙1基、ピット9を検出した。遺物はSD1から土師器・須恵器の破片が少量出土した。
- (3) C区 土壙7基、ピット28を検出した。遺物は土壙内から土師器の破片が少量出土した。
- (4) D区 土壙2基、ピット3を検出した。遺構に伴う遺物はないが、調査区内から須恵器（甕）、土師器の破片が出土している。
- (5) E区 掘立柱建物跡2棟、ピット4を検出した。遺構に伴う遺物はない。
- (6) F区 積穴住居跡21軒、掘立柱建物跡2棟、土壙12基、ピット多数を検出した。遺物は弥生土器（壺）、土師器（甕・壺・鉢・高杯・椀・瓶・手づくね土器）、須恵器（杯蓋・杯身・高杯・椀・甕・瓶）、須恵質土器（椀・杯・鍋）、土師質土器（椀・皿・鍋）、青磁（椀）、白磁（椀・皿・合子）、備前焼（甕）、龜山焼（甕）のほか、石器（敲石・石鎌）、石製品（紡錘車・砥石・石鍋）、鐵器（釘・不明鐵製品）、土製品（輪羽口・竈）、ガラス小玉が出土した。



第3図 調査区位置図（1：2,000）（アミ目は調査区）

第Ⅳ章 遺構と遺物

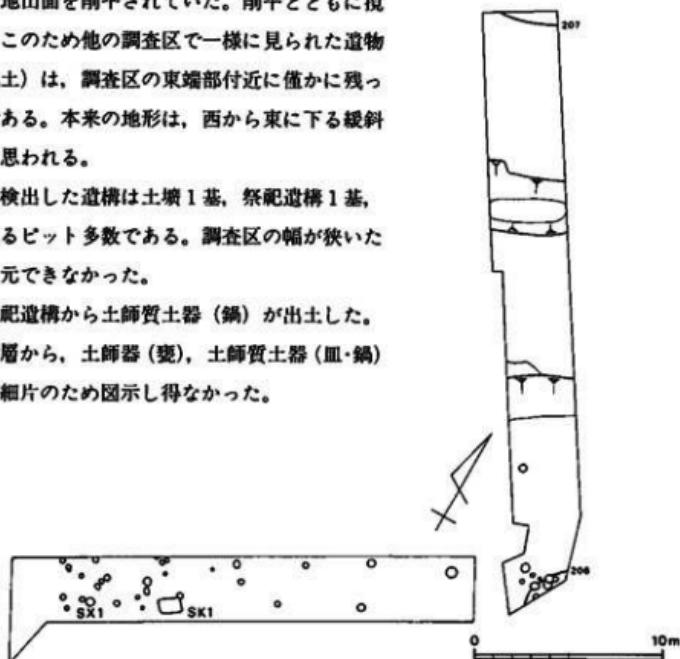
(1) A区(第4図)

A区は、調査範囲の最北部にある。民家の敷地に沿ってL字状に設けられた調査区で、幅約4mである。調査前の状況は、L字状のコーナー部分で上下2段に分かれた畝になってしまい、標高が北側で207.2m、南側で206.6mであった。調査区北西端では、さらに北側の畝との間に約2mの段差があるため、遺構面が削平されていることが推定できた。L字状のコーナー部分は、民家の排水路になっており発掘調査できなかった。

調査の結果、遺構は地山面で検出した。地山面は、調査区北西端で現地表下約20cm、調査区東端で同じく約120cm、調査区西端では約30cmで確認した。標高は206.0～207.0mである。調査区の北西部と南半部分は地山面を削平されていた。削平とともに搅乱が著しく、このため他の調査区で一様に見られた遺物包含層(黒色土)は、調査区の東端部付近に僅かに残っているのみである。本来の地形は、西から東に下る緩斜面であったと思われる。

本調査区で検出した遺構は土壤1基、祭祀遺構1基、柱穴と思われるピット多数である。調査区の幅が狭いため建物跡を復元できなかった。

遺物は、祭祀遺構から土師質土器(鍋)が出土した。また遺物包含層から、土師器(甕)、土師質土器(皿・鍋)が出土したが細片のため図示し得なかった。



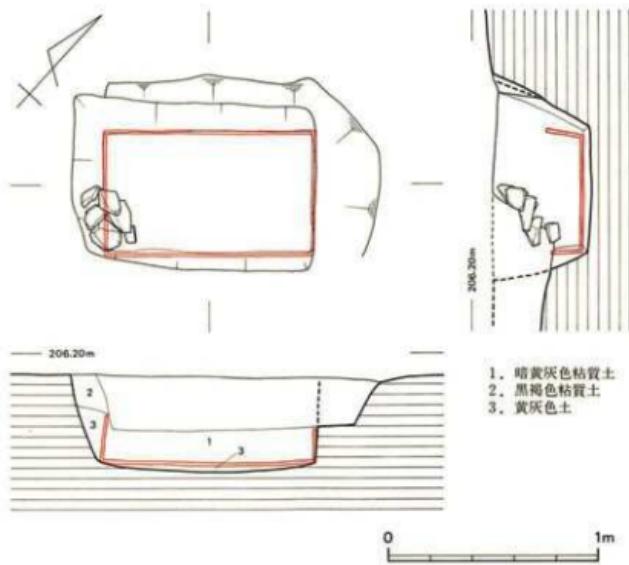
第4図 A区遺構配置図(1:300)

造構

埋葬施設

SK 1 (第5図)

SK 1は、調査区南西部で検出した木棺墓である。平面形が長方形で、長さ1.01m、幅0.60mの木棺痕跡を検出した。土壤の上部を搅乱されているため、最も残りの良い南西側で深さ23cmである。木質は残っていなかった。側板は土圧でやや傾いており、鉄釘が出土しなかったことから、組合せ式の木棺と考えられる。掘り方の平面形はほぼ長方形で、断面は逆台形である。北東側が搅乱されており上端の規模は不明であるが、残存する規模は長さ1.16m、幅0.80m、深さ43cmである。底面の規模は長さ1.00m、幅0.59mである。掘り方の南側隅から、数個の角礫が落ち込んだ状態で出土した。この礫の性格は不明であるが、土壤上面に何らかの石積みの施設があったと思われる。木棺内部や掘り方内から、遺物は出土しなかった。

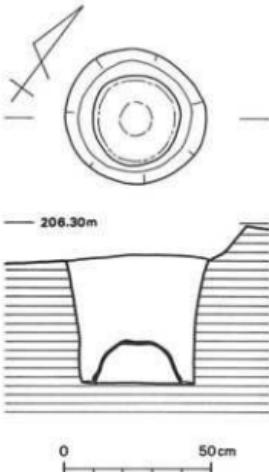


第5図 SK 1実測図 (1 : 30)

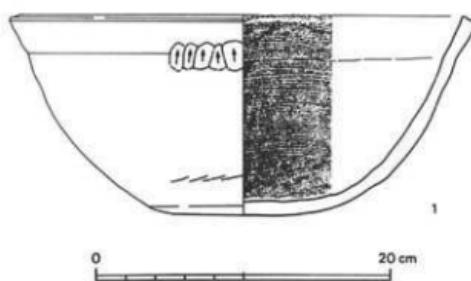
祭祀遺構

S X 1 (第6図)

S X 1 は、SK 1 の南西約4mで検出した土壌である。平面形はほぼ円形で径45cm、深さ43cmである。上端は搅乱で約10cm削平されているため、本来50cm以上の深さがあったと思われる。土壌内部は暗褐灰色土が堆積しており、土壌底面に口径30.0cmの完形の土師質土器の鍋が伏せて置かれていた。鍋の内部は空洞であったが、内部底面に草木の茎が腐食して残っていた。ほかには何も出土しなかった。本遺構の周囲にはいくつかの柱穴があり、掘立柱建物があったと思われる。建物との位置関係は不明であるが、本遺構はこれらの建物に関連した祭祀遺構と考えられる。



第6図 S X 1 実測図 (1 : 20)



第7図 S X 1 出土遺物実測図 (1 : 4)

(2) B区 (第8図)

B区は、調査範囲の西端にあたる。本調査区は調査前一枚の平坦な畑になつており、調査区の南辺と西辺には石垣が築かれていた。標高は204.7mであった。調査の結果、地山面で遺構を検出した。地山面は、調査区北西端で現地表下約40cm、南東端で同じく約110cmで確認した。標高は203.3~204.3mで、北から南に下る緩斜面である。

本調査区で検出した遺構は、柵1条、掘立柱建物跡2棟、溝1条、土壙1基、ピット9である。

遺物は、溝から土師器・須恵器の破片が少量出土したのみである。小片のため、図示することはできなかった。

遺構

柵

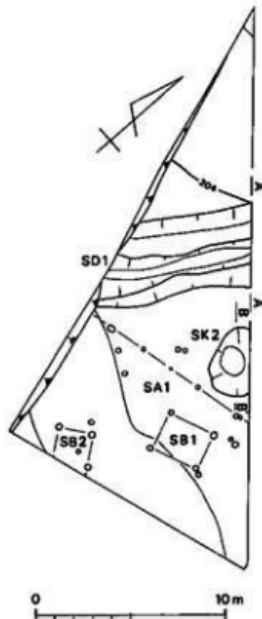
S A 1 (第9図)

S A 1は、調査区ほぼ中央にある柵列である。柱穴は径20~30cm、深さ5~20cmである。間隔はP 2~P 3が2.5m、P 3~P 4が3.5m、P 4~P 5が2.0mである。P 1、P 2は接している。P 3とP 4の間は広いためさらに1ないし2の柱穴があったものと思われる。調査区外の東西両方向に延びると思われる。柱穴の中からは、何も出土しなかつた。時期は不明である。

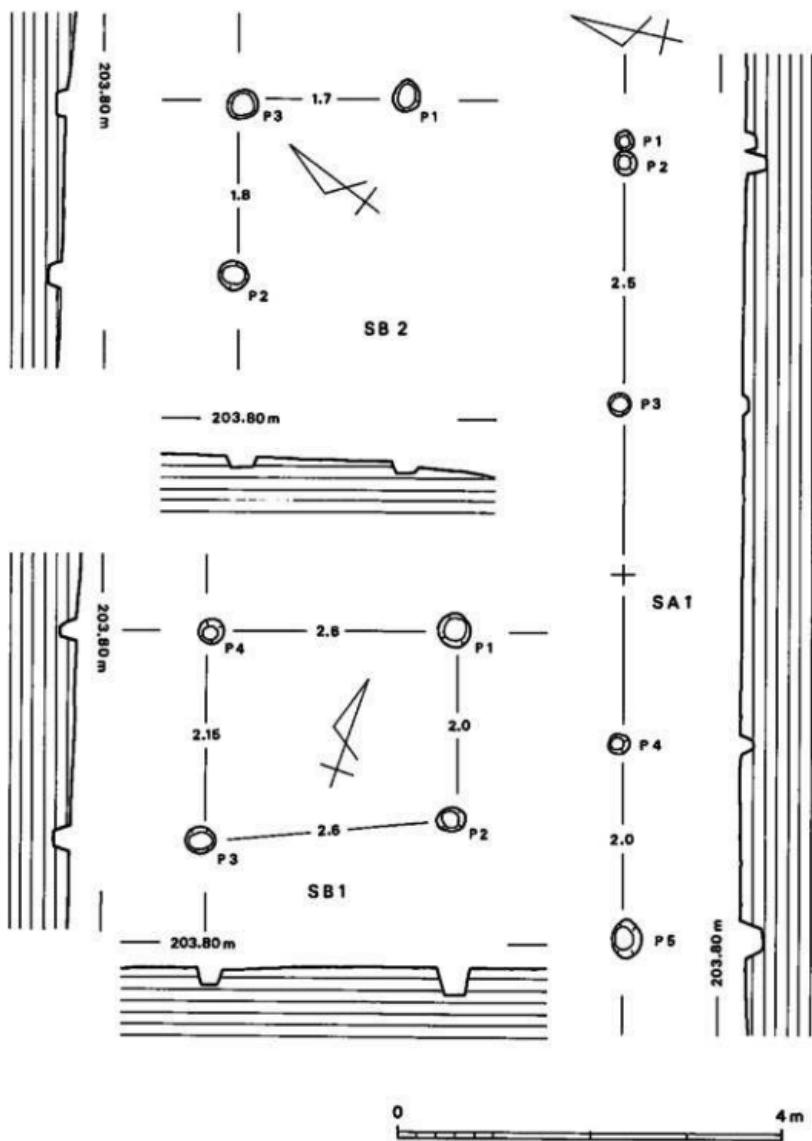
掘立柱建物跡

S B 1 (第9図)

S B 1は、S A 1の南約1.5mにある一間四方の掘立柱建物跡である。柱穴は径25~30cm、深さ15~30cmである。柱間はP 1~P 2が2.0m、P 2~P 3とP 1~P 4が2.6m、P 3からP 4が2.15mである。柱穴内からは何も出土していない。時期・用途は不明である。



第8図 B区遺構配置図 (1:300)



第9図 SA1, SB1・2実測図 (1:60)

S B 2 (第9図)

S B 2は、調査区南端にある掘立柱建物跡である。柱穴は径30cm、深さ10~15cmである。柱間はP 1~P 3が1.7m、P 2~P 3が1.8mである。一間四方の建物であるが調査区外に統く可能性がある。柱穴内からは何も出土せず、時期・性格は不明である。

溝

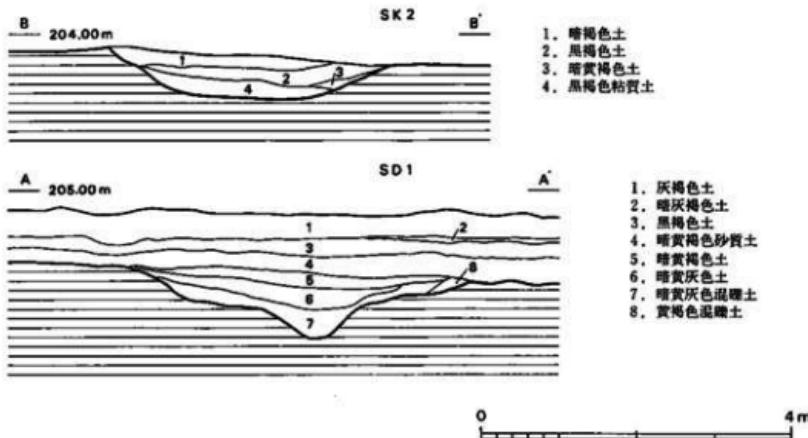
S D 1 (第10図)

S D 1は、調査区中央を北東から南西方向に流れる二段掘りの溝である。規模は調査区北東端で、上端の幅4.45m、深さ80cm、南辺上端の長さ8.2mである。南西側底部は北東側より約50cm低くなっている。調査区外の北東・南西両方向に延びていると推定される。溝内埋土から、土師器・須恵器の破片が少量出土したが、時期は不明である。

土壤

S K 2 (第10図)

S K 2は、SD 1の南東約2mにある土壙である。径3.6m、深さは北西側の上端から底面まで62cmである。北東方向は調査区外に延びている。遺物は何も出土していない。時期は不明である。



第10図 SD 1, SK 2 土層断面図 (1:80)

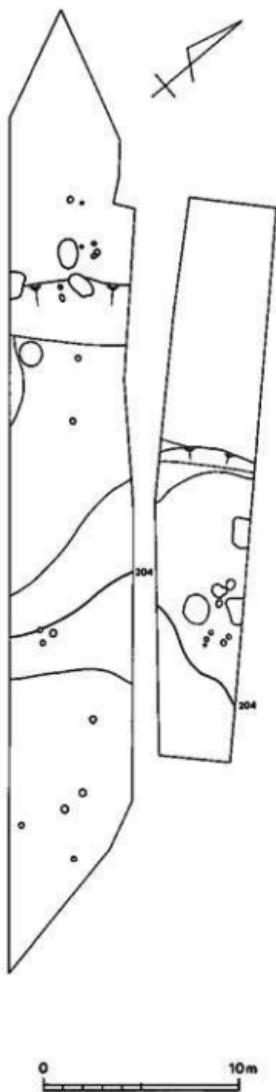
(3) C区 (第11図)

C区は、A・B・D・F区に囲まれた、調査範囲のほぼ中央に位置する。調査前の状況は、調査区内を東西に二分するように北西から南東方向に石組み護岸の水路がとおっていた。この水路から東側が南北2段、西側が南北3段に分かれた畝になっていた。標高は東側の畝が北から205.1m, 204.7mで、西側の畝が北から205.7m, 205.2m, 204.7mである。水路の石組み護岸の掘り方や、畝の境に造られたコンクリート製の畦の掘り方で遺構面がかなり荒らされていることが想定できた。

調査の結果、地山面で遺構を検出した。地山面は、西端で現地表下約80cm、東端で同じく約100cm、北端で同じく約30cm、南端で同じく約60cmで確認できた。遺物包含層である黒色土は、水路から東側の南半部で残っていたが、攪乱が多数あり而で検出することはできなかった。水路部分は、護岸の石組みの掘り方が地山面以下まで達していたため、調査区内への漏水を防ぐため残した。本来の地形は、北西から南東に下る緩斜面であったと推定される。

本調査区で検出した遺構は、土壙7基、ピット28である。土壙は径1.3~1.5m、深さ約5~40cmである。埋土から土師器の破片が出土している土壙もあり、時期は古墳時代後期と思われるが明らかではない。ピットは径15~45cm、深さ5~50cmである。掘立柱建物の柱穴と考えられるが建物を復元できるものはなかった。

遺物は、土壙とピット内、遺物包含層から土師器・須恵器の破片が少量出土した。いずれも細片のため図示し得なかった。



第11図 C区遺構配置図 (1:300)

(4) D区 (第12図)

D区は、調査範囲の東端にある。南北2枚の畝にまたがり、L字状に設定された調査区である。標高は北側で203.6m、南側で203.4mである。調査区の北東側と南西側の端に石垣が築かれており、南北2枚の畝の間には石組み護岸の水路がある。調査区の幅が狭いため石垣の掘り方で広い範囲が搅乱されていることが想定できた。

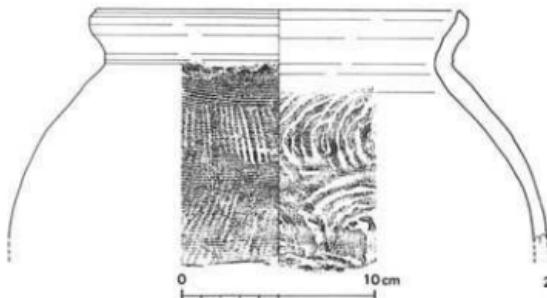
調査の結果、調査区北西端で現地表下約30cm、東端で同じく約70cmで地表面を確認した。標高は202.3~203.1mである。調査区のコーナー部分から北西・南西方向に約6mの範囲は地山面に達する深い搅乱があった。遺物包含層は、北西端で地山上に約20cm、南西端で同じく約10cm堆積しており、コーナー部分に向かって厚くなっている。調査範囲が狭いため明確ではないが、ほぼ西から東に緩く下る地形と推定される。

本調査区で検出した遺構は、土壙2基、ピット3である。土壙は、平面形が楕円形で、地山面での規模が1.1×0.7m、深さ10cmのものと、円形で径70cm、深さ15cmものである。ピットは径30~40cm、深さ6~12cmである。いずれも遺物包含層の上面から掘り込まれていたと考えられる。

遺物は、遺構内からは出土しなかった。遺物包含層から須恵器(甕)、土師器、陶磁器の破片が少量出土した。



第12図 D区遺構配置図 (1:300)



第13図 D区内出土遺物実測図 (1:3)

遺物

須恵器（第13図）

甕（2） 口縁部～胴部上半の破片で、復元口径18.7cmである。口縁部は、外反気味に立ち上がり、口縁端部は上方に引き出している。調整は、口縁部が内外面ともロクロナデ、胴部内面は同心円状のタキの後ヨコナデを雜に施している。外面は平行タキ後横方向のカキ目を施している。色調は、内面が淡青灰色、口縁部が淡褐灰色、外面が青灰色である。胎土は、0.5mm大の砂粒を多く含んでいる。焼成は良好である。ロクロの回転方向は、反時計回りである。

（5）E区（第14図）

E区は調査範囲の南東端にあたり、農機具小屋の敷地内だけの狭い調査区である。調査前の状況は、調査区の南辺に石垣が築かれておりすぐ南側の田と約1mの段差があった。石垣の掘り方で造構面が削られていることが想定できた。標高は199.8mであった。

調査の結果、造構は地山面で検出した。地山面は、調査区西端で現地表下約30cm、東端で同じく約70cmで確認した。標高は199.1～199.5mである。北西から南東に緩く下る地形と思われる。調査区南半部は地山面に達する掘り込みがあり、また漆喰で塗り固めた近現代の土壤もあった。

本調査区で検出した造構は、掘立柱建物跡2棟とピット4である。

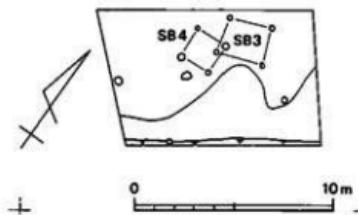
遺物は、土師器の破片が少量出土したが、図示し得なかった。

造構

掘立柱建物跡

S B 3（第15図）

S B 3は、調査区中央北寄りにある掘立柱建物跡である。柱穴は径25～30cm、深さ10～20cmである。柱間はP 1～P 2が1.9m、P 2～P 3が2.3m、P 3～P 4が1.85m、P 1～P 4が2.2mである。東西方向がやや長くなっている。一間四方の建物跡であるが北側の調査区外に延びている可能性もある。柱穴内からは

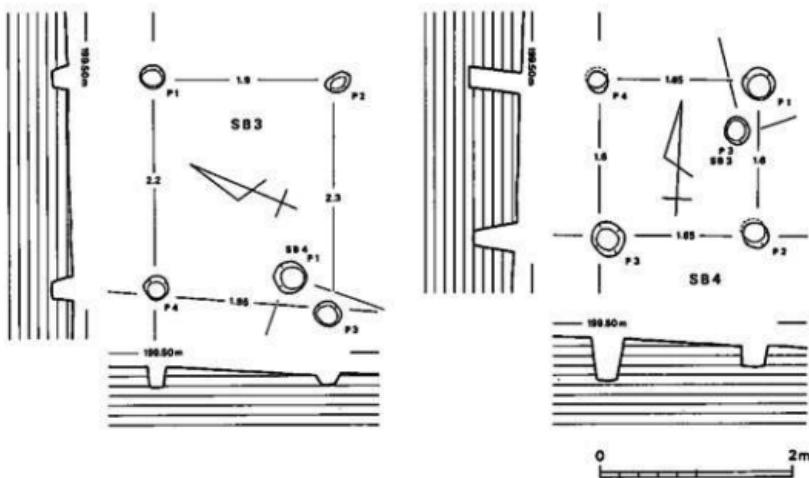


第14図 E区造構配置図（1:300）

何も出土しておらず、時期・性格は不明である。

SB 4 (第15図)

SB 4は、SB 3と一部重複した西隣にある一間四方の掘立柱建物跡である。柱穴は径20~35cm、深さ20~55cmである。柱間は、P 1~P 2とP 3~P 4が1.6m、P 1~P 4とP 2~P 3が1.65mで、ほぼ正方形である。柱穴内からは何も出土しておらず、時期・性格ともに不明である。



第15図 SB 3・4実測図 (1 : 60)

(6) F区（第16図）

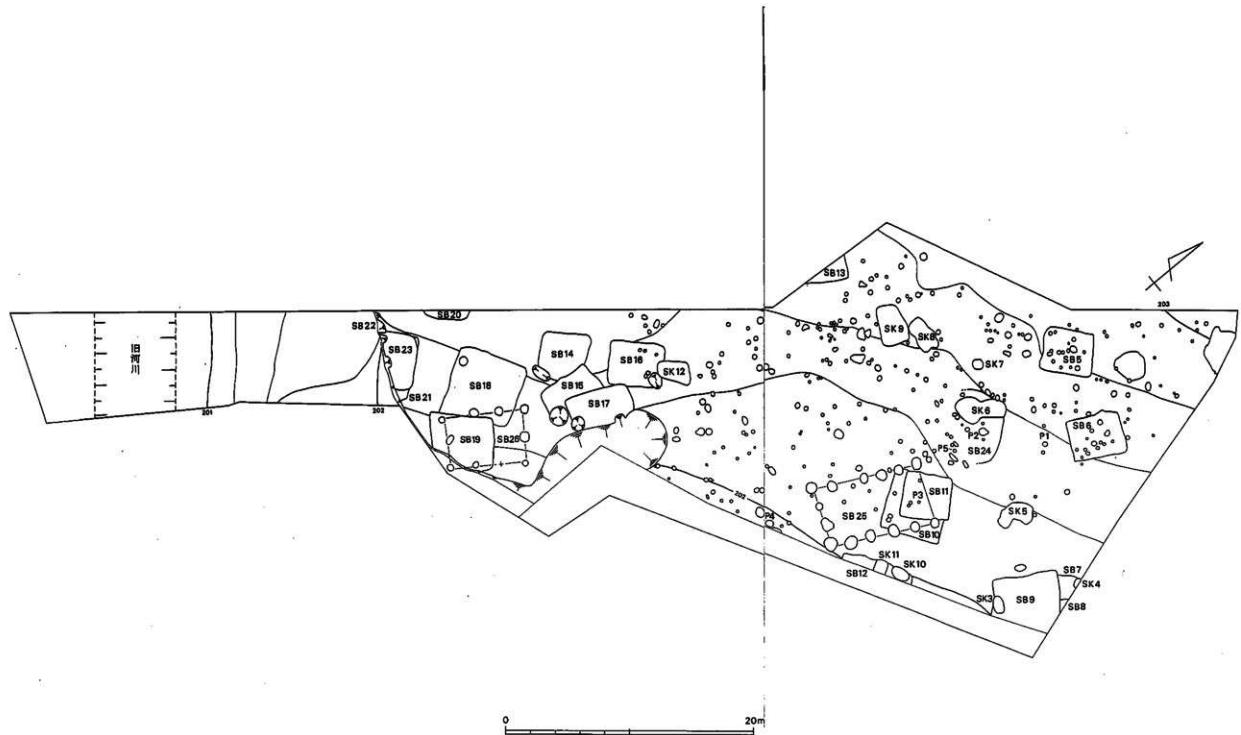
F区は、調査範囲の中央南寄りに位置する。北東～南西方向が約100m、北西～南東方向が最大幅約34mで、6か所の調査区の中では最も広い。調査前の状況は、調査区のほぼ中央を南北に水路が貫き、水路から北東側が南北に並ぶ4段の畝で、水路から南西側が北東～南西に並ぶ4段の畝になっていた。調査前の標高は東半部が202.1～203.6m、西半部が201.5～203.6mであった。畝の境には石垣やコンクリートの畦が築かれており、特に調査区の南西端から約30m付近で約1.5mの段差があるため、調査区南西部は造構面が削平されていることが予想できた。

調査の結果、地山面で造構を検出した。北東端で現地表下約20cm、南西端で同じく約40cm、南東部で同じく約60cmで地山面を確認した。地山面の標高は200.7～202.9mである。地山面上には遺物包含層である黒色土・黒褐色土があり厚い部分では約30cmにおよぶ。調査区南西部では北西から南東方向に流れる幅約6.5m、深さ約1.5mの旧河川を検出した。この旧河川は地下水脈になっており、崩落の危険性があったため規模を確認した後埋め戻した。最下層には自然木などの木質が約20～30cmの厚さで堆積しており、堆積土内からは弥生土器（壺）、土師器（甕）、須恵器（杯蓋・杯身・高杯）の破片が少量出土した。

当時の地形は、調査区北東端から約35m付近が浅い谷地形になっており、この谷地形をはさむように調査区北東端と、南西端から約45m付近が微高地になっている。調査区南西端から30m付近以西は南西方向に緩く下り旧河川につながっている。

本調査区で検出した造構は、竪穴住居跡21軒（S B 5～24）、掘立柱建物跡2棟（S B25・26）、土壙12基（SK 3～12）のほか、掘立柱建物跡の柱穴と考えられるピット多数である。このうち竪穴住居跡は東西の微高地上に集中しており、柱穴は主に調査区東半分に広く分布している。調査区西側の旧河川付近では造構は確認できなかった。このように建物が偏って存在するのは当時の地形に左右されたもので、竪穴住居が建てられた時期には東西の微高地の間の谷が存在したが、多くの柱穴が掘られた中世には谷が埋まり平坦になっていたと推定される。

遺物は各造構から少量出土したが、大半が造構内流入土からである。種類は弥生土器（壺）、土師器（甕・壺・鉢・高杯・椀・瓶・手づくね土器）、須恵器（杯蓋・杯身・高杯・椀・甕・甌）、須恵質土器（椀・杯・鍋）、土師質土器（椀・皿・鍋）、青磁（椀）、白磁（椀・皿・合子）、備前焼（甌）、龜山焼（甌）等の土器のほか、石器（敲石・石鐵）、石製品（紡錘車・砥石・石鍋）、鐵器（鉄釘・不明鐵製品）、土製品（轆羽口・竈）、ガラス小玉である。



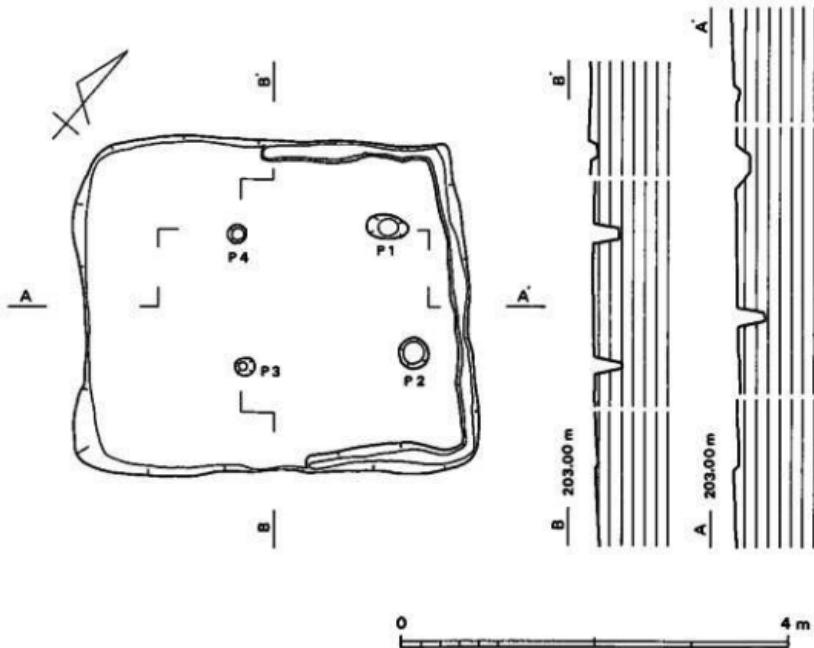
第16図 F区造林配置図 (1 : 300)

遺構と遺物

竪穴住居跡

S B 5 (第17図)

S B 5は、調査区北端付近にある竪穴住居跡である。住居跡の平面形は長方形で、規模は $4.0 \times 3.4\text{m}$ である。住居跡の上部は削平されており、壁高は北側の最も高いところで10cmである。壁面下には壁溝があるが、住居跡の南西半分は途切れている。幅は10~30cmである。主柱穴は4個で4本柱構造である。住居跡内の北東側に寄せて立てられている。柱穴は径20~30cm、深さ15~30cmである。柱間はP 1~P 2が1.3m、P 2~P 3が1.7m、P 3~P 4が1.35m、P 4~P 1が1.65mである。住居跡の埋土は黒褐色土である。遺物は、住居跡埋土から土師器の破片が少量出土したが、図示し得なかった。

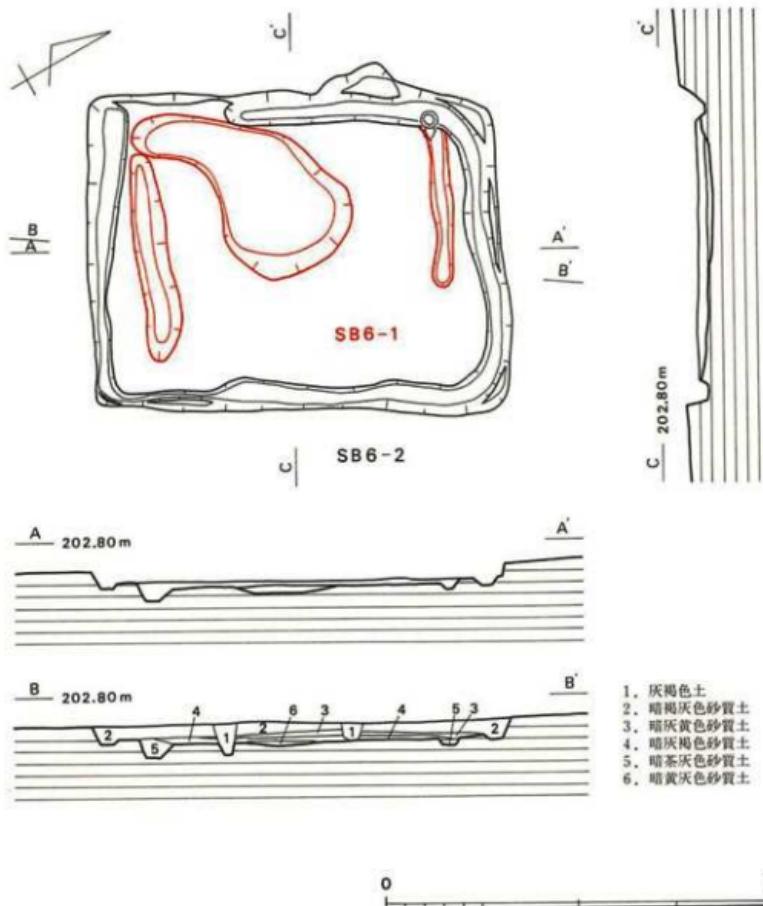


第17図 S B 5実測図 (1 : 60)

SB 6 (第18図)

SB 6は、SB 5から東約3mにある竪穴住居跡である。貼り床構造になっており、貼り床から下をSB 6-1、上をSB 6-2とする。

SB 6-1は、SB 6-2の床面をなす暗灰黄色砂質土・暗灰褐色砂質土を除去した段階で検出し、不整形の土壌と南北両側の溝があった。土壌は 2.4×1.3 m、深さ約10cmであ



第18図 SB 6実測図 (1:60)

る。溝の間隔は2.8mで、南西側が長さ2m、幅34cm、北東側が長さ1.65m、幅15~20cmである。北東側の溝はSB6-2の壁溝につながっている。柱穴は確認できなかった。

SB6-2は、平面形が長方形で4.3×3.3mである。壁高は北側隅で約25cmである。壁溝は住居跡の四周を巡っているが、北西隅から東へ約1mは途切れており、幅は10~40cmである。柱穴は確認できなかった。遺物はSB6-2から弥生土器(壺)・土師器(甕・鉢・瓶)・須恵器(杯蓋)・土師質土器(皿)が出土した。SB6-1からは出土しなかった。3・4はSB6-2の北側隅の住居跡壁溝埋土上、5~11・88は住居跡埋土から出土した。

遺物

弥生土器(図版19)

壺(88) 小片で部位も不明である。全体的に緩く内湾している。調整は内外面とも細かいヘラミガキで、外面には凹線を5条以上施す。色調は淡茶灰色で、胎土は2mm大の砂粒を多く含む。焼成は良好である。

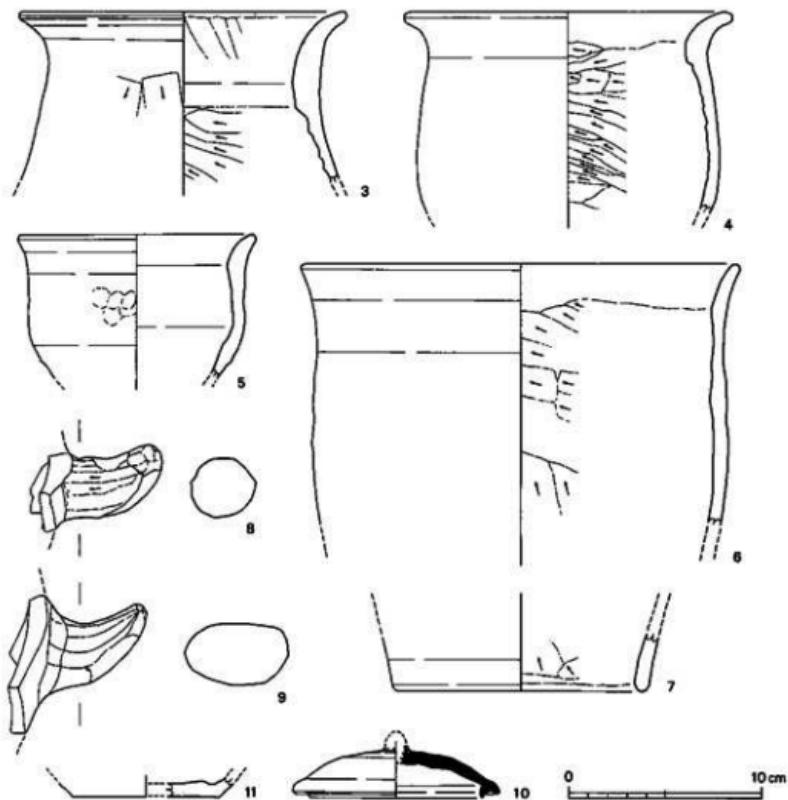
土師器(第19図)

甕(3・4) 3は口縁部~胴部上端が残っており、口径は16.7cmである。4は口縁部~胴部下半の破片で、復元口径は16.1cmである。3は胴部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がり口縁端部だけ大きく外反する。4は頸部から口縁端部にむけて外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。調整は、3が内面胴部には横方向のヘラケズリを施すが、一つのケズリの幅が狭く、ヘラケズリの痕跡が顕著である。口縁部内外面はヨコナデを行い、胴部外面は縦方向のナデがあるが、板状の工具を使用したと思われる。口縁部上面は平坦になっている。4は胴部内面に横方向のヘラケズリ、口縁部内外面にヨコナデを施す。色調は3が淡灰茶色で外面の一部にススが付着する。4が内面黄灰色~暗褐色、外面淡黄灰色~灰茶色である。胎土はどちらも0.5~2mm大の砂粒が多く混じるが、3は胎土中に茶色粘土粒を少量含む。焼成は、3が良好で、4はやや悪い。

鉢(5) 口縁部~体部下半の破片で復元口径は12.0cmである。頸部から口縁部にかけてゆるく外反し体部は下方が大きく屈曲する。調整は口縁部内外面がヨコナデで体部外面の一部に指頭痕が残る。色調は内面が黒灰色~淡灰茶色、外面が灰褐色~暗灰褐色で一部にススが付着している。胎土は1mm大の砂粒を少量含み、焼成は悪い。

瓶(6~9) 6は口縁部~胴部、7は底部の破片で、復元径は6が22.3cm、7が12.8cmである。また8・9は把手部である。胴部~把手外端までは、8が5.5cm、9が5.6cmで、

把手中央での厚さは 8 が 3.4×3.0 cm, 9 が 5.4×3.2 cmである。6 は胸部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は胴部との境からやや外反し、口縁端部に面を持つ。調整は内面胴部下半に縦方向のヘラケズリ、胴部上半に横方向のヘラケズリを施すが、他は不明である。7 は底部から外上方にまっすぐのびている。調整は底部内面が縦方向のヘラケズリで他は不明である。8 は胴部から水平にのびた後、外上方に屈曲し端部は丸くおさめる。横断面はほぼ円形である。調整は全体的に横方向のヘラケズリで、端部に指頭痕を残す。9 は胴部から大きく反りながら外上方にのび、基部に比べて先端部は細く仕上げる。横断面は橢円形



第18図 SB 6 出土遺物実測図 (1 : 3)

である。調整は全体的に横方向のヘラケズリで、先端から下面にかけて指頭痕が残る。色調は6が内面淡黄茶色、外面黄茶色、7が黄茶色、8が淡灰色～黄灰色、9が淡灰色～淡黄灰色である。胎土は、いずれも2mm大の砂粒を多く含み、焼成も悪い。6と7は同一個体と思われる。

須恵器（第19図）

杯蓋（10） 天井部中央が欠失し、かえりの端部が口縁端部より下方にのびている。復元口径は10.4cmである。調整は、全面ロクロナデであるが、天井部内面中央はロクロナデ後一部に仕上げナデをし、天井部外面中央は回転ヘラケズリをしている。色調は、内面と断面が淡青色で、外面が灰かぶりで暗緑色を呈する。胎土は礫砂粒を多く含む。焼成は良好で、ロクロの回転方向は時計回りである。

土師質土器（第19図）

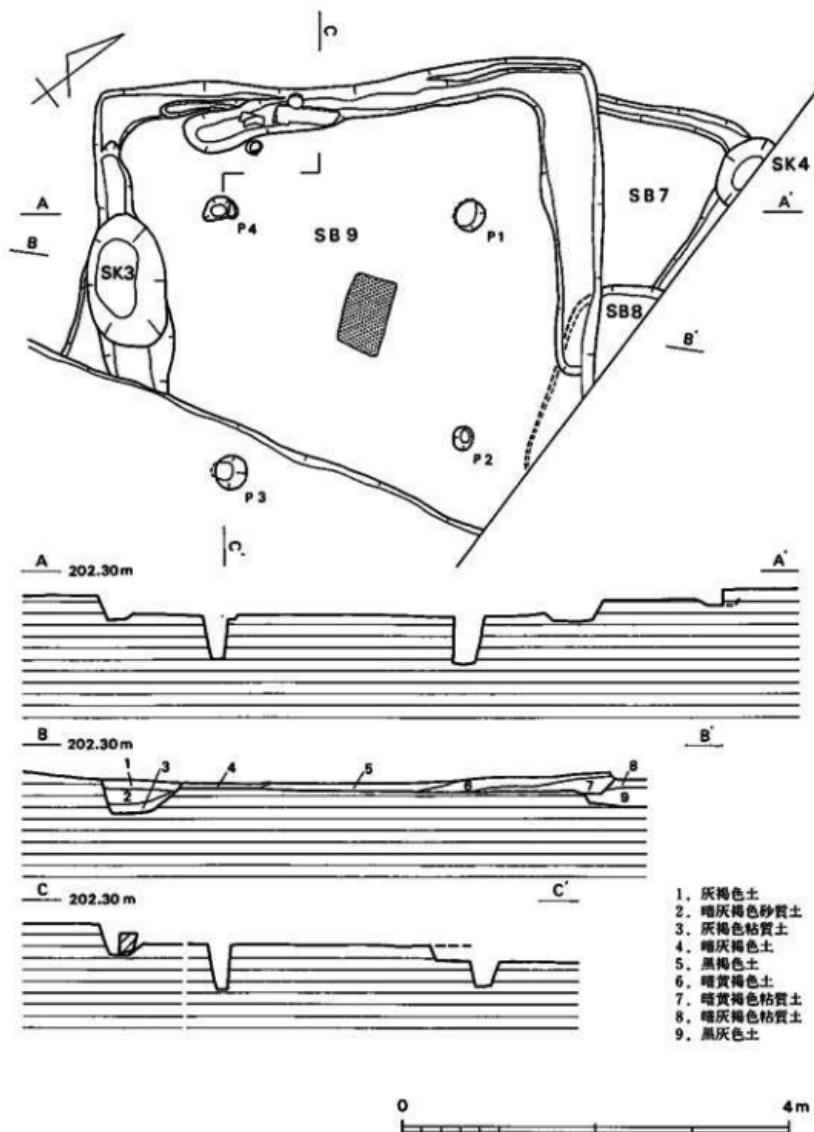
皿（11） 底部の破片で、復元底径7.6cmである。底部外面は平坦で、内面は口縁部との境がくぼむ。調整は底部内面が一方向ナデで、くぼんだ部分がロクロナデである。底部外面は回転糸切り後板目痕が残り、口縁部外面はロクロナデである。色調は淡茶色で、胎土は砂粒をほとんど含まない。焼成は悪く、ロクロの回転方向は、時計回りと思われる。

S B 7（第20図）

S B 7は堅穴住居跡で、S B 8・9、SK 4と重複している。平面形は方形で、住居跡の北東隅から南西方向に1.6m、南東方向に1.8mの範囲が残っている。壁高は、北側隅で約10cmで、壁溝は、幅約20cmである。柱穴は確認できず、遺物も出土しなかった。他の遺構との新旧関係は、S B 7→SK 4、S B 7→S B 8→S B 9である。

S B 8（第20図）

S B 8は調査区東隅にある堅穴住居跡で、S B 7・9と重複している。住居跡の北西隅から、北東方向に70cm、南東方向に2mの範囲が調査区内で、大部分は調査区外である。壁高は最も良く残っているところで27cmである。壁溝・柱穴はなく、遺物も出土していない。S B 7・9との新旧関係は、S B 7→S B 8→S B 9である。



第20図 SB7～9実測図 (1:60) (アミ目部分は、床面が焼けている)

S B 9 (第20図)

S B 9は、S B 7・8、S K 3と重複している堅穴住居跡である。平面形は方形で、南北5.25m、住居跡南東辺は削平されており、最も良く残った部分で東西4.85mである。壁面下に壁溝がめぐっているが、住居跡の東側は一部途切れており、また北西側は二重になっている。幅は25~65cmである。主柱穴は4個で径20~35cm、深さ25~48cmである。柱間は、P 1~P 2が2.35m、P 2~P 3が2.45m、P 3~P 4が2.6m、P 1~P 4が2.55mである。主柱穴に開まれた範囲のはば中央に、75×45cmの長方形に床面が焼けた部分がある。移動式の竈を据えていたと思われる。住居跡北西辺の中央付近には70×20cm、厚さ20cmの石がある。壁溝の埋土上にあり用途など不明である。遺物は、弥生土器(壺)、土師器(壺・手づくね土器)、須恵器(杯身・鷹)、土製品(輪羽口・竈)が出土した。14~16は住居跡北西辺の石の周辺でまとまって出土した。14は壁溝埋土上、15は住居跡埋土中、16は石の上に載っていた。12・13・17~21・89は住居跡埋土中から出土した。他の遺構との新旧関係は、S B 7→S B 8→S B 9、S B 9→S K 3である。

遺物

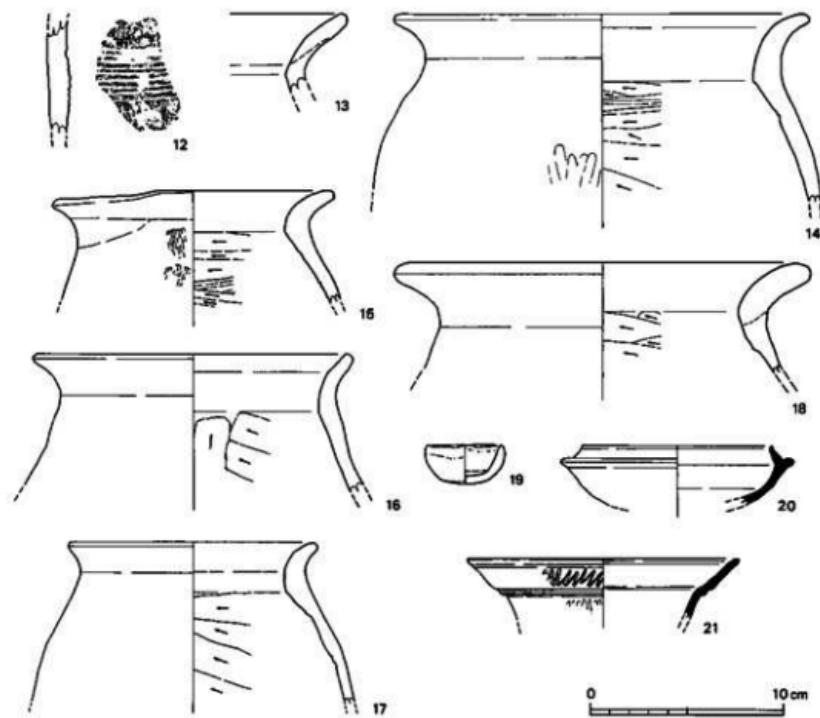
弥生土器 (第21図)

壺 (12) 頸部付近と思われる破片で径を復元することはできなかった。調整は外面に9条のヘラ書き沈線がある。色調は淡茶灰色で、胎土には2mm大の砂粒を少量含む。焼成は、良好である。時期は弥生時代前期と思われる。

土師器 (第21図)

壺 (13~18) 13は口縁部~頸部の破片である。口径は復元できなかった。頸部から上部はやや外反し、口縁端部は丸くおさめる。調整は、口縁部の内外面がヨコナデで、内面頸部以下は横方向のヘラケズリである。色調は黄茶色で、胎土は0.5mm大の砂粒とともに赤褐色の粘土粒を多く含む。焼成は良好である。14~16は口縁部~胴部上半が残っており、口径は14が20.7cm、15が14.1cm、16が16.2cmである。14は口縁部が頸部から外上方に外反しながら立ち上がり、口縁端部はさらに大きく屈曲する。胴部は緩く内湾する。15は、口縁部が頸部から大きく外反し外上方にのびる。16は口縁部が頸部からやや外反し、口縁端部は内湾気味に立ち上がる。調整は、14は内面頸部以下に横方向のヘラケズリ、口縁部内外面に粗いヨコナデ、胴部外面には縦方向の粗いヘラミガキを施している。15は内面頸部以下に横方向のヘラケズリ、口縁部内外面は粗いヨコナデ、外面胴部は一部に縦方向のハ

ケ目を施している。16は内面頸部以下は縦方向のヘラケズリ、外面は粗いヨコナデを施している。色調は、14が黄茶色、15・16が淡黄茶色を呈する。14は口縁部内外面の一部にススが付着し、15は胴部外面の一部が淡赤色に赤変している。胎土は0.5~2mm大の砂粒を14・16は多く、15は少量含む。焼成はいずれも良好である。17・18は口縁部~胴部上半の破片で、復元口径は17が12.4cm、18が20.0cmである。どちらも口縁部は頸部から外上方に外反して立ち上がり、端部を丸くおさめる。18は胴部に比べて口縁部が大きく肥厚する。調整は、内面の頸部以下に横方向のヘラケズリ、口縁部内外面と胴部外面に粗いヨコナデを施している。色調は、17が内面淡灰茶色、外面淡黄灰色~淡黄茶色で、18は内面淡茶黄色、外面淡黄褐色である。胎土は0.5~2mm大の砂粒を多く含み、焼成は悪い。



第21図 SB 9出土遺物実測図 (1:3)

手づくね土器 (19) 口縁部～底部の破片で、復元口径3.8cm、器高2.0cmである。調整は不明で、色調は淡茶灰色である。胎土に0.5mm大の砂粒を少量含み、焼成は悪い。

須恵器 (第21図)

杯身 (20) 底部中央を欠失する破片で、復元口径は9.7cmである。受部は肥厚し、やや上方にのびる。たちあがり部は大きく内傾するが、口縁端部は上方に引き上げられる。調整は内外面ともロクロナデである。色調は内面が暗青灰色、外面が淡青灰色であるが、一部に灰かぶりがあり暗緑灰色を呈する。胎土は微砂粒を多く含み、焼成は良好である。ロクロの回転方向は不明である。

翫 (21) 口縁部～頸部上半の破片で、復元口径は14.0cmである。頸部は外上方に直線的にのび、口縁部はさらに外方に開いている。頸部と口縁部の境の突堤は丸く、口縁端部には面を持つ。口縁部と頸部の外面には波状文をめぐらしている。色調は内面が灰かぶりのため暗緑灰色、外面が淡青灰色で、断面は暗青灰色を呈する。外面の一部に暗緑灰色の自然釉がかかる。胎土は、0.5～1mm大の砂粒を少量含む。焼成は良好である。ロクロの回転方向は不明である。

土製品 (図版20)

縄羽口 (89) 羽口の先端の破片で、中心孔の径は2.9cmである。先端から約4cmしか残っていないため全体の大きさは不明である。内面は暗灰茶色で、外面は溶解し暗灰褐色～黒褐色を呈する。2mm大の砂粒を多く含む。

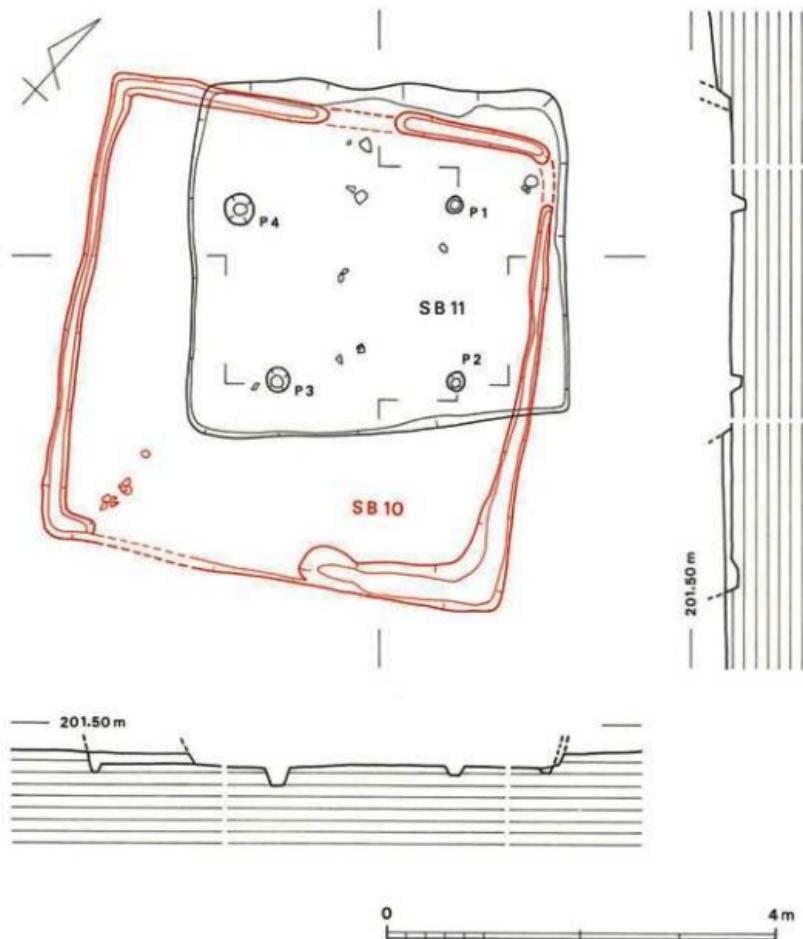
S B10 (第22図)

S B10は、調査区南東部にある竪穴住居跡で、S B11・25と重複している。住居跡の平面形はほぼ正方形で、4.9×4.8mである。壁高は、住居跡北西隅付近で約20cmである。住居跡床面は、遺構検出面から約10cmで確認した。壁面下には壁溝が巡っているが、住居跡南東側と北東隅、北西辺中央のそれぞれ一部が途切れている。北側の2か所はS B11と重複しているため、壁溝の浅い部分が削平されたものと思われる。壁溝の幅は10～40cmである。柱穴は、確認できなかった。遺物は土師器(甕)、須恵器(杯蓋・杯身)、石器(敲石)が出土した。31・33は住居跡南西隅の床面から出土した。他の遺構との新旧関係は、S B10→S B11→S B25である。

遺物

土師器（第23図）

甕 (31) 口縁部～胴部下半の破片で、復元口径は15.8cmである。胴部は球形で、頸部から口縁端部にかけて外反し、口縁端部には面を持つ。調整は内面頸部以下に横方向への



第22図 SB 10・11実測図 (1 : 60)

ラケズリ、口縁部内外面と胴部外面上半にヨコナデを施している。他は不明である。色調は内面が灰褐色、外面は焼けており赤褐色～灰褐色で、断面は黄灰色を呈する。また外面口縁部下半から胴部にかけてススが付着している。胎土は0.5mm大の砂粒を少量含み、焼成は良好である。

石器（第24図）

敲石（33） 平面形はほぼ円形である。長さ・幅とも8.3cm、厚さ3.5cm、重さ424gで、石質は閃綠岩である。上下両端に敲打痕があり、表裏面には擦痕が残っている。

S B11（第22図）

S B11は、S B10-25と重複している竪穴住居跡である。平面形はほぼ正方形で、3.9×3.6mである。壁高は住居跡北東隅で18cmで、壁溝はない。主柱穴は4個で、径17～30cm、深さ10～20cmである。柱間は、P 1～P 2とP 3～P 4が1.8m、P 2～P 3が1.85m、P 1～P 4が2.15mである。住居跡の埋土は黒褐色土である。遺物は土師器（甕・椀・高杯・瓶）、須恵器（杯蓋・椀・匙）、石製品（紡錘車）が出土した。23・25～30は住居跡床面から出土し、22・24・32は住居跡埋土から出土した。他の遺構との新旧関係はS B10→S B11→S B25である。

遺物

土師器（第23図）

甕（22～24） いずれも口縁部～胴部上半の破片で、復元口径は22が17.0cm、23が20.7cm、24が11.0cmである。22は口縁部が頸部から上方に垂直にのびた後大きく外反する。口縁端部は丸くおさめる。調整は、胴部内面に横方向のヘラケズリ、口縁部内外面にヨコナデを施し、口縁部内面の一部に斜め方向のハケ目が残る。23は口縁部が頸部から外上方にのび、口縁端部に面を持つ。調整は、胴部内面に横方向のヘラケズリ、口縁部内外面と胴部外面上端付近にヨコナデを施す。24は口縁部が頸部で外上方に屈曲する。調整は、外面にヨコナデを施し、内面は不明である。色調は、22が乳茶色、23が内面暗黄灰色～淡褐灰色、外面淡黄茶色、断面淡黄灰色、24が淡褐灰色で一部黒褐色を呈する。胎土は22が0.5mm大の砂粒を少量、23が0.5～1mm大の砂粒を多く、24が微砂粒を少量含む。焼成はいずれもやや悪い。

椀 (25) 底部中央を欠失した破片で、復元口径は9.4cmである。全体的に球形で、底部と体部との境は明瞭ではない。粘土紐の積み上げ痕が残るが、調整は不明である。色調は、内面が茶褐色～暗褐色、外面が淡黄褐色である。胎土は0.5～1mm大の砂粒を少量含む。焼成は悪い。

瓶 (26) 脚部下半～底部の破片で、復元底径は9.2cmである。底部から外上方に緩やかに内湾しながらのびる。調整は脚部内面が縦方向のヘラケズリ、底部のみヨコナデ、外面は縦方向のヘラナデを施す。色調は内面が黄茶色、外面が淡黄茶色である。胎土は1mm大の砂粒を少量含み、焼成は良好である。

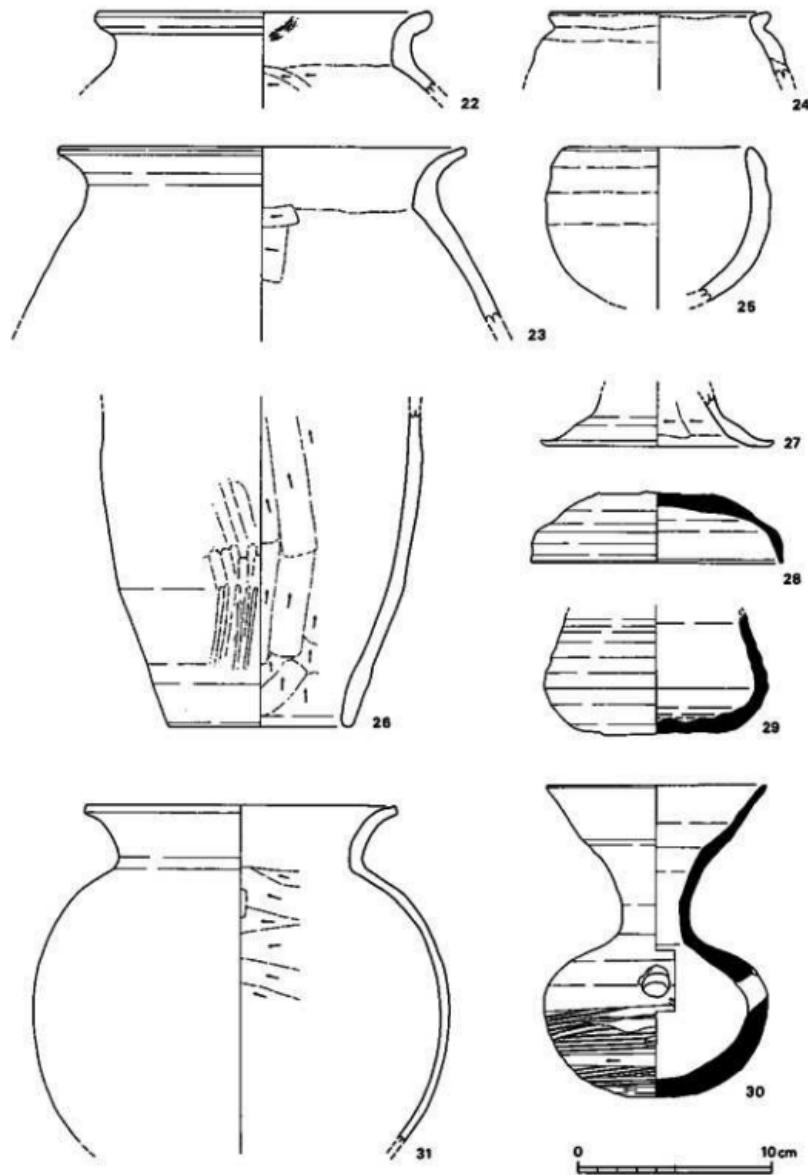
高杯 (27) 脚柱部下半～脚裾部の破片で、復元脚径は11.4cmである。内面の脚柱部と脚裾部の境に稜を持ち、脚裾部はそこから大きく外反する。脚端部には面を持つ。内面の稜から上部は横方向のヘラケズリ、外面はヨコナデを施している。色調は内面が淡黄灰色、外面が暗黄灰色、断面が黄灰色～黄茶色である。胎土は1mm大の砂粒を少量含み、焼成はやや悪い。

須恵器（第23図）

杯蓋 (28) 口縁端部～天井部の破片で、復元口径は12.8cmである。外面天井部は平坦で、天井部と口縁部の境は浅くくぼむ。口縁端部はやや外反する。調整は内面天井部が仕上げナデ、内外面口縁部がロクロナデ、外面天井部は回転ヘラ切り後、雑なユビナデである。色調は内面が青灰色、外面が暗青灰色、断面が暗茶灰色である。胎土は0.5mm大の砂粒を多く含み、焼成は良好である。ロクロの回転方向は、反時計回りである。

椀 (29) 口縁部～底部の破片で、底径は7.3cm、体部最大径は11.5cmである。口縁部は内傾し、口縁端部にむけてまっすぐのびる。調整は内面がロクロナデ、外面底部は回転ヘラ切り後未調整、体部は回転ヘラケズリ、口縁部はロクロナデを施している。色調は内面と外面上半が暗青灰色、外面下半が青灰色である。胎土は0.5～1mm大の砂粒を少量含み、焼成は良好である。ロクロの回転方向は、時計回りである。

甕 (30) 頸部以下は完形で、復元口径は11.1cm、器高は16.0cm、体部最大径は11.5cmである。肩部の円孔の径は1.4cmである。胴部は球形で、肩部は丸く不明瞭である。底部中央がわずかに平坦になる。頸部は外反し、頸部上端がわずかにくぼみ口縁部との境をなしている。口縁部は外上方にまっすぐのび、口縁端部は丸くおさめる。また肩部には円孔を穿つ。調整は口縁部・頸部内外面にロクロナデ、胴部上半はカキ目後ロクロナデ、胴部下半はカキ目後粗いヘラケズリを施す。円孔は調整後穿っている。色調は内面と外面胴部上

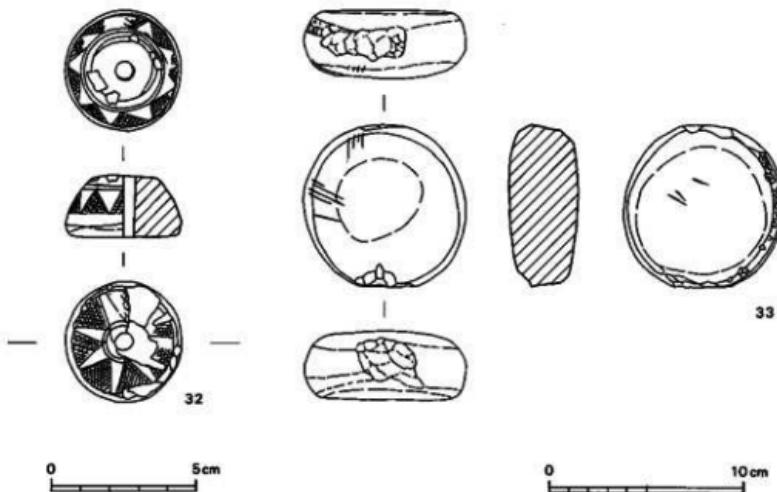


第23図 SB10・11出土遺物実測図(1) (1:3)

半が淡青灰色、外面胴部下半が青灰色である。胎土は0.5mm大の砂粒を少量含み、焼成は良好である。ロクロの回転方向は、時計回りである。

石製品（第24図）

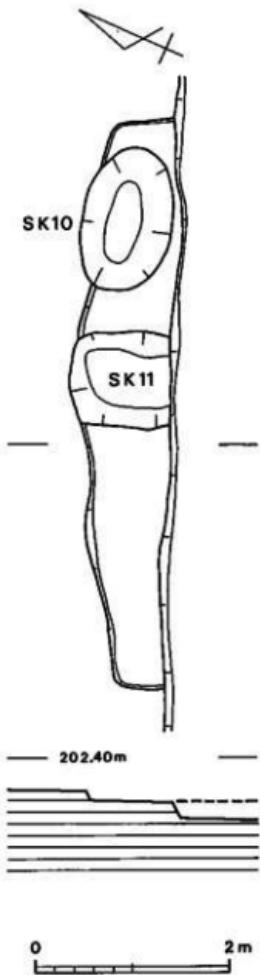
紡錘車（32） 滑石製で、大きさは上面径2.3cm、底面径3.65cm、最大径4.0cm、高さ2.1cmである。中心には径0.65cmの軸棒孔がある。底面から0.4~0.5cmまでは逆台形をなし、その上部は内湾ぎみの環体斜面になっている。環体斜面には、底面から0.8cm、1.6cm、1.8cmのところに圓線がまわる。底面から数えて第1線と第2線の間には頂点を上方に向けた鋸齒文がめぐり、鋸齒文内には斜格子を刻む。第1・第2の圓線は環体斜面を一周した後、一部で交差している。また底面にも中心から0.6cm、0.7cm、1.7cmのところに圓線がまわり、中心から数えて第2線と第3線の間に頂点を中心向けた鋸齒文がめぐり、鋸齒文内には斜格子を刻む。なお環体斜面下部や逆台形部分には、使用痕と思われる横方向の擦痕が多い数あり、線刻にも擦り減った部分がある。重さは52.2gで、色調は暗茶灰色~乳茶色である。



第24図 SB10・11出土遺物実測図（2）（32は1：2、33は1：3）

S B12 (第25図)

S B12は、S B10から南へ約3mにある竪穴住居跡で、SK10・11と重複している。住居跡の南側が畑の境で10~15cmの段差になっており、南北は0.95mしか残っていない。東西は5.85mである。壁高は、住居跡の北西側で約5cmである。壁溝はない。柱穴はなく、遺物も出土していない。他の遺構との新旧関係は、S B12→SK10・11である。



第25図 S B12実測図 (1:60)

S B13 (第26図)

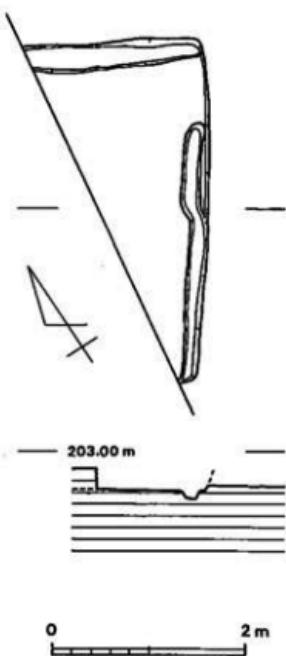
S B13は、調査区が北西側に広がった位置にある竪穴住居跡である。住居跡の規模は、北東辺が1.85mまで確認し、南東辺は3.6mである。壁高は北東隅で約6cmである。壁面下には壁溝があるが、南東辺が北側で約70cm途切れており幅は20~30cmである。柱穴は確認できなかった。遺物は土師器（高杯・椀）が出土した。34・35は住居跡の埋土から出土した。

遺物

土師器 (第27図)

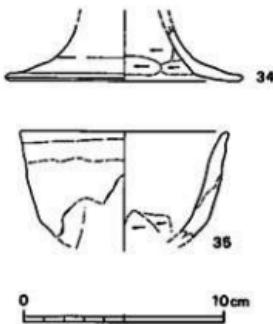
高杯 (34) 脚柱部下半～脚裾部の破片で、復元口径は11.5cmである。内面の脚柱部と脚裾部の境に稜を持ち、脚裾部はそこから大きく外反する。調整は、内面脚柱部が横方向のヘラケズリで、他は器表が荒れているため不明である。色調は淡灰黄色である。胎土は0.5~1mm大の砂粒を多く含む。焼成はやや悪く表面の風化が進んでいる。

椀 (35) 口縁部～底部上半の破片で、復元口径は10.2cmである。底部と口縁部の境は「く」字状に屈曲し、口縁部はそこから外上方にまっすぐのびるが、口



第26図 SB13実測図 (1 : 60)

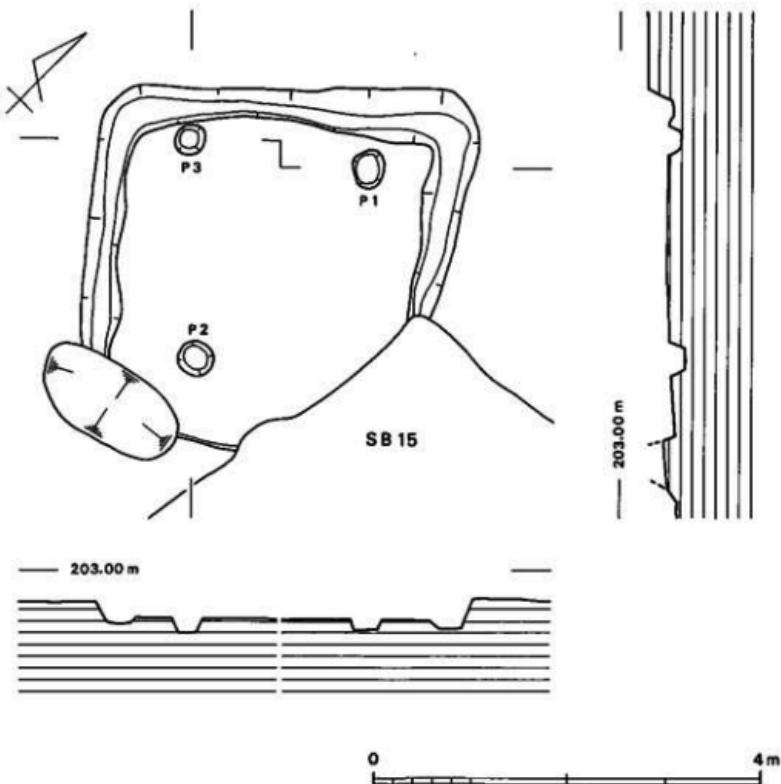
縁端部で僅かに外反する。外面や断面には粘土紐の繋ぎ目が明らかである。調整は内面底部に雜な横方向のヘラケズリ、内面口縁部と外面口縁端部以下1.5cmの範囲は雜なヨコナデを施している。外面の口縁部上半～底部は成形後調整していない。色調は淡黄灰色である。胎土は、0.5mm大の砂粒を少量含む。焼成は悪い。



第27図 SB13出土遺物実測図 (1 : 3)

SB14（第28図）

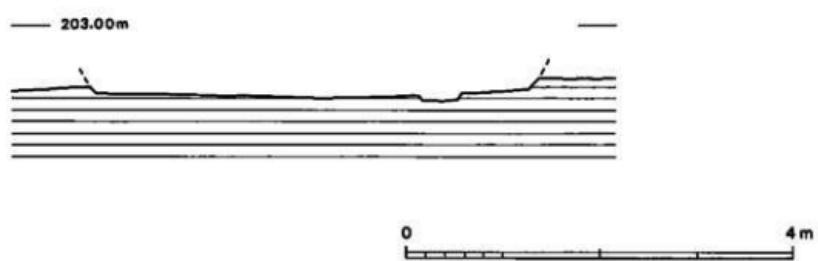
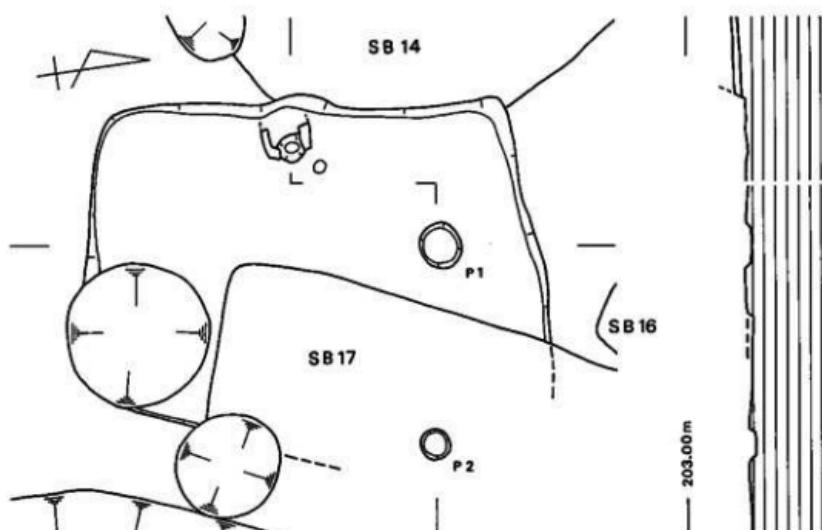
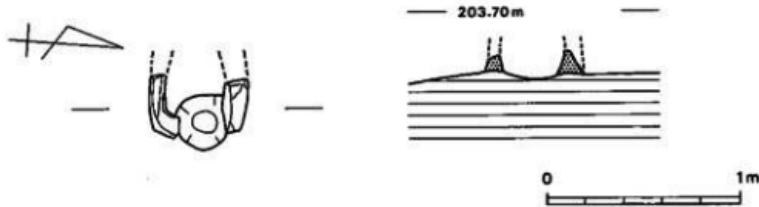
SB14は、調査区中央南西寄りにある竪穴住居跡で、SB15と重複している。平面形はほぼ正方形で、3.9×3.8mである。壁高は北東隅で約25cmである。住居跡床面は、遺構検出面から約10cmで確認した。壁面下に壁溝があり、幅は30～60cmである。住居跡南辺の壁溝は南西隅が搅乱され、南東隅がSB15に切られているが、元々なかったと思われる。柱穴は3個検出したが、元来は4本柱であったと思われる。規模は径30～40cm、深さ10～15cmで、柱間はP1～P3が1.9m、P2～P3が2.3mである。遺物は土師器(甌)、須恵器(杯身・杯蓋・高杯)が住居跡内埋土から少量出土したが、細片のため図示し得なかった。他の遺構との新旧関係は、SB14→SB15である。



第28図 SB14実測図 (1 : 60)

SB 15 (第29図)

SB 15は、SB 14の東側にある堅穴住居跡でSB 14・17と重複関係にある。平面形は長方形で4.7×3.4mである。壁高は西隅で約25cmで、壁溝はない。柱穴は2個検出したが本来は4本柱であったと思われる。規模は、径30~45cm、深さ5~8cmで、柱間はP1~P2が2mである。住居跡西辺の中央付近にカマドがある。カマドは袖部と火床が残っており、火床は径30cm、深さ5cmである。袖は暗灰褐色粘質土と黄白色粘土の混じった土で築



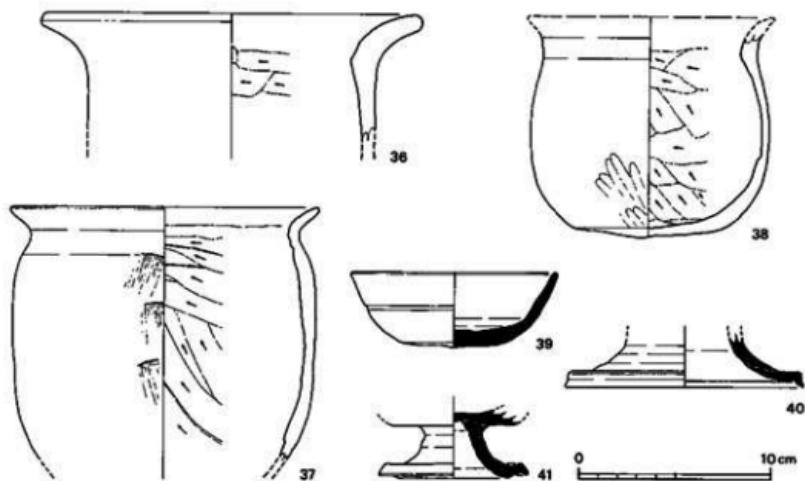
第29図 SB15実測図 (1:60, カマドは1:30)

かれ内側は赤変している。長さは約30cmが残っており煙道部は搅乱されていた。遺物は土師器(甕)、須恵器(杯身・高杯)が出土した。36~41は住居跡内埋土から出土した。他の遺構との新旧関係は、SB14→SB15→SB17である。

遺物

土師器(第30図)

甕(36~38) 36は口縁部~胴部上半、37は口縁部~胴部下半、38は口縁部下半~底部の破片で、36は復元口径18.8cm、37は復元口径15.6cm、38は底径7.8cmである。36は頸部内面に稜を持ち、口縁部は外上方に大きく外反してのびる。口縁部は肥厚し口縁端部を丸くおさめる。調整は胴部内面が横方向のヘラケズリ、口縁部がヨコナデ、胴部外面は調整不明である。37は胴部中央がほぼ垂直で、頸部は丸く口縁部は外上方にまっすぐのびる。調整は内面胴部下半が斜め方向のヘラケズリ、胴部上半が横方向のヘラケズリ、口縁部内外面と頸部外面がヨコナデを施し、胴部外面に縱方向のハケ目が残る。38は底部がほぼ平坦で胴部は丸く、口縁部は外上方に外反してのびる。調整は胴部内面が斜め方向のヘラケズリ、外面口縁部~胴部が縱方向のハケ目後難なヘラミガキである。しかし外面は火を受けしており表面が剥離している。色調は、36が内面淡灰茶色、外面淡灰茶色~淡灰褐色、37は



第30図 SB15出土遺物実測図 (1:3)

淡茶灰色で、外面の一部が淡赤褐色である。38は内面暗黄茶色、外面暗黄褐色で、外面の一部にススが付着している。胎土は、36が1mm大の砂粒、37が0.5mm大の砂粒を多く含み、38は1mm大の砂粒を少量含む。焼成は、36・37が不良で、38は二次焼成のため全体的にもろい。

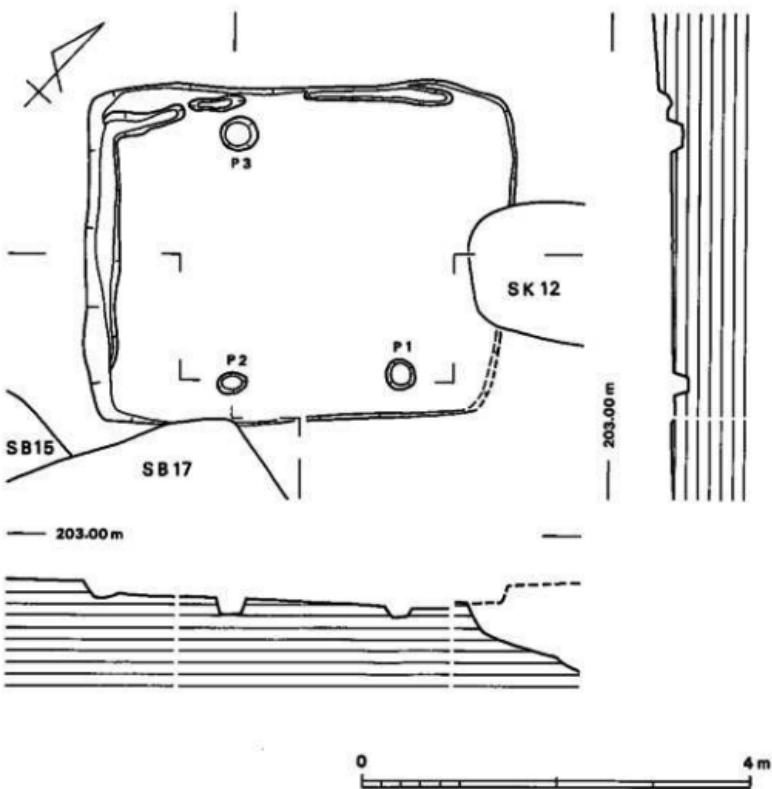
須恵器（第30図）

杯身（39） 口縁端部を一部欠くがほぼ完形で、復元口径10.5cm、器高3.9cmである。底部はほぼ平坦で、口縁部は底部から外上方にまっすぐのびる。調整は、内面底部中央が仕上げナデ、外面底部が回転ヘラ切り後難なユビナデ、内面底部～外面口縁部がロクロナデである。外面体部下半に凹線が2本入るが一周せず途切れている。色調は、内外面とも淡青灰色である。胎土は1mm大の砂粒を少量含み、焼成は良好である。ロクロの回転方向は時計回りである。

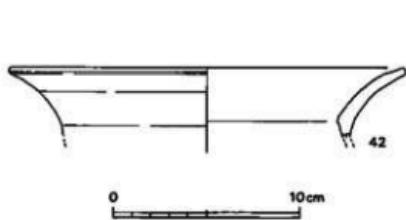
高杯（40・41） 40は脚柱部下半～脚端部、41は杯底部～脚端部の破片である。復元脚径は40が12.4cm、41が7.6cmである。40は脚柱部と脚裾部の境は明瞭でなく、脚裾部は外下方に大きく外反する。脚端部を折り曲げ外下方に引き出し、外側に面を造り出す。調整はロクロナデである。41は、脚部が杯底面の脚取付け部から外下方にまっすぐのびた後外上方に反っている。脚端部は外下方に折り曲げ、外側に面を造る。調整は杯内面底部に仕上げナデのほかは、内外面ともロクロナデである。色調は、40が内面淡青灰色、外面淡茶灰色、断面灰茶色、41が内外面暗青灰色、断面青灰色である。胎土は40が微砂粒、41が0.5mm大の砂粒をそれぞれ少量含む。焼成は、40がやや悪く、41が良好である。ロクロの回転方向はどちらも時計回りである。

S B16（第31図）

S B16は、S B14の北東約2mにある竪穴住居跡で、S B17、SK12と重複している。平面形は長方形で4.4×3.5mである。壁高は北西隅で約20cmである。壁溝は住居跡の北西辺と南西辺にあるが、一部で途切れている。幅は10～30cmである。柱穴は3個検出したが、本来は4本柱であったと思われる。規模は、径25～40cm、深さ10～15cmで、柱間はP1～P2が1.8m、P2～P3が2.6mである。遺物は、土師器（甕）・須恵器の破片が少量出土した。42は柱穴内埋土から出土した。他の遺構との新旧関係はS B16→S B17、S B16→SK12である。



第31図 SB 16実測図 (1 : 60)



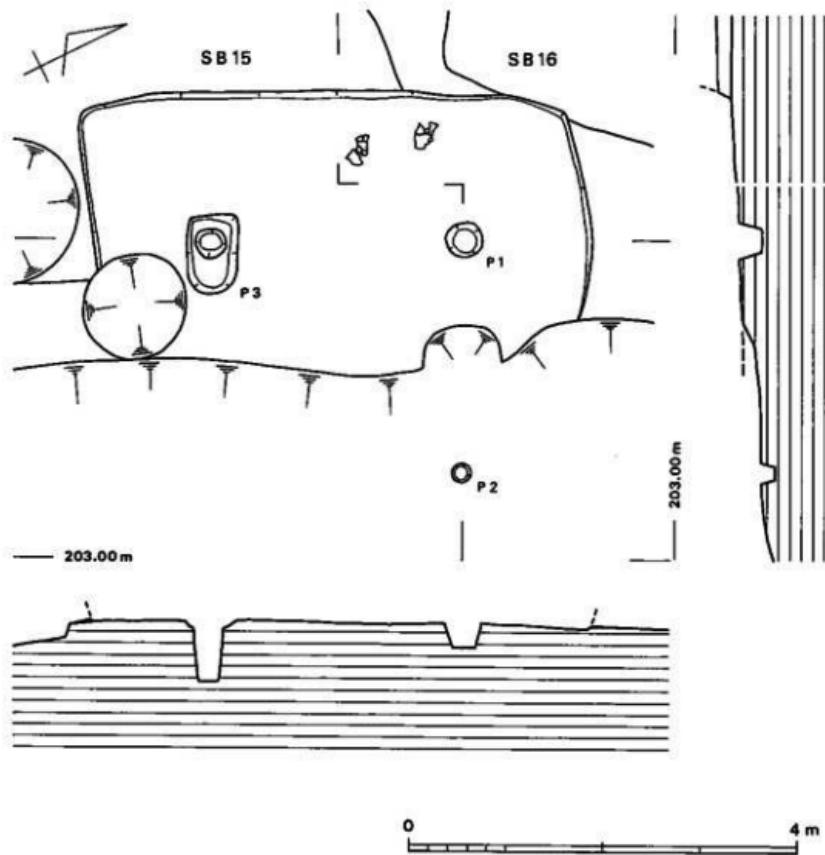
第32図 SB 16出土遺物実測図 (1 : 3)

遺物 土師器 (第32図)

甕 (42) 口縁部の破片で、復元口径は20.9cmである。頸部からやや外反し、口縁端部には面を持つ。調整は不明である。色調は茶黄色で、胎土は0.5~2mm大の砂粒を多く含むほか、植物の纖維が混入していた痕跡がある。焼成は悪い。

S B17 (第33図)

S B17は、S B16の南にある竪穴住居跡で、S B15・16と重複している。住居跡の東半は削平されており、南北5.1m、東西2.9mが残っている。壁高は住居跡西辺の最も残りの良いところで約10cmである。壁溝はない。柱穴は3個検出したが、本来は4本柱であったと思われる。規模は、径20~40cm、深さ15~60cmで、柱間はP 1~P 2が2.4m、P 1~P 3が2.6mである。遺物は、土師器(甕)・須恵器(杯蓋・高杯)が出土した。44・45は住



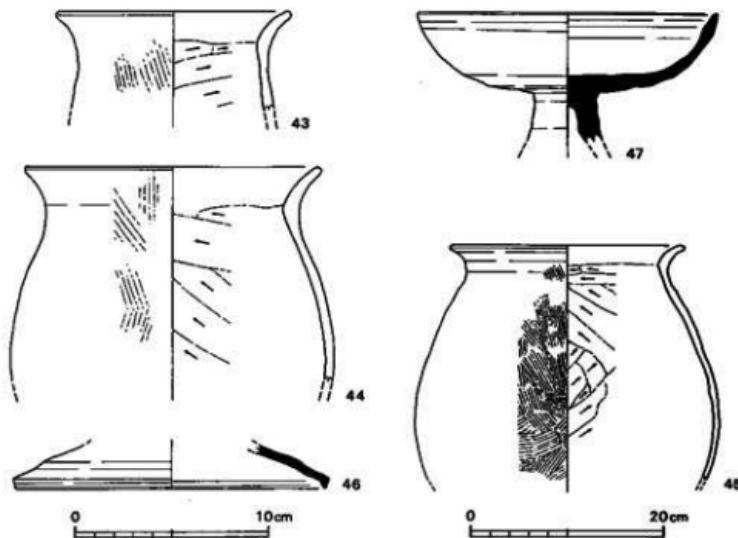
第33図 S B17実測図 (1 : 60)

居跡床面、43・46・47は住居跡埋土から出土した。SB17は、SB15・16の埋土を切るよう掘り込んでおり、これらの遺構との新旧関係は、SB15・16→SB17である。

遺物

土師器（第34図）

甕（43～45） 43は口縁部～胴部上半、44・45は口縁部～胴部下半の破片で、復元口径は43が 11.7cm 、44が 15.0cm 、45が 23.5cm である。43は口縁部が外反し、胴部が外下方にまっすぐのびる。調整は口縁部内外面にヨコナデ、胴部内面に横方向のヘラケズリ、胴部外面に縦方向のハケ目を施し、外面の一部に粗いヨコナデを行う。44は口縁部がやや外反し、胴部が内湾する。調整は口縁端部と口縁部内面がヨコナデ、胴部内面が斜め方向のヘラケズリ、外面口縁部以下が縦方向のハケ目で口縁部外面～胴部上端にハケ目後粗いヨコナデを施す。45は口縁部が外反し、胴部が外下方にまっすぐのびた後内湾する。調整は口縁部がヨコナデ、胴部内面の上端が横方向、上半が左上がり、下半が右上がりのヘラケズリを



第34図 SB17出土遺物実測図（1：3、45は1：6）

施す。胸部外面の上半に縦方向、下半に横・斜め方向のハケ目が残り、頸部外面はハケ目の上にヨコナデを施している。色調は、43が内面暗灰褐色、外面黄茶色、44が灰褐色、45が淡黄茶色で外面胸部下半にはスグが付着している。43・44は火を受けて表面が剥離し、淡赤褐色～赤褐色を呈する。胎土は43が1～3mm大の砂粒を少量含み、44が0.5mm大、45は1mm大の砂粒を多く含む。焼成はいずれも悪い。

須恵器（第34図）

杯蓋（46） 口縁部の破片で、復元口径は15.8cmである。口縁端部は下方に折り曲げ細く引き出し外側に面を造る。調整は内面口縁部の残存上方端に仕上げナデ、他はロクロナデを施す。色調は淡青灰色で、胎土は0.5～1mm大の砂粒を多く含む。焼成は良好で、ロクロの回転方向は時計回りである。

高杯（47） 杯部～脚部上半が残り、口径は15.3cmである。杯部は、取付け部から水平にのび、口縁部は上方へ内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は外上方に開いている。口縁端部付近がやや肥厚するが、口縁端部は細くおさめる。脚部外面はほぼ垂直であるが、内面には稜を持ち、そこから外下方に開く。調整は杯内面底部が仕上げナデ、他はロクロナデである。色調は淡青灰色であるが、外面のほとんどが淡灰茶色である。胎土は1～3mm大の砂粒を少量含み、焼成は良好である。ロクロの回転方向は時計回りである。

S B18（第35図）

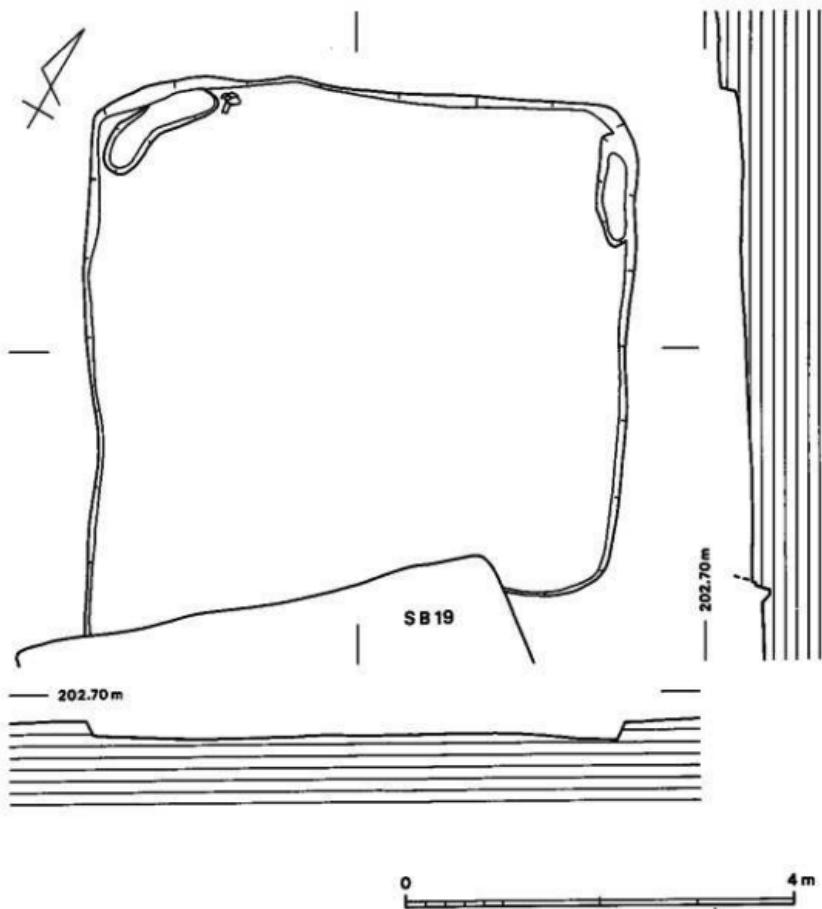
S B18はS B14から南西約1mにある竪穴住居跡で、S B19・26と重複している。平面形はほぼ正方形で5.6×5.1mであるが、住居跡南西隅はやや南に広がっている。壁高は住居跡北西隅で約25cmである。壁溝は住居跡北西・北東隅にあるが、途切れている。幅約40cm、深さ約5cmである。柱穴は確認できなかった。遺物は、土師器（甕）、須恵器（杯蓋・杯身・高杯）が出土した。いずれも住居跡内埋土から出土したが、このうち48・49・54・55は、住居跡北西隅からまとめて出土した。他の遺構との新旧関係はS B18→S B19、S B18→S B26である。

遺物

土師器（第36図）

甕（48・49） どちらも口縁部～胸部上半の破片で復元口径は48が12.5cm、49が25.0cm

である。48は口縁部が頸部からやや外反して立ち上がり口縁端部に面を持つ。調整は胴部内面が横方向のヘラケズリで、他は不明である。49は口縁部が大きく外反し胴部は頸部から外下方にまっすぐのびる。調整は、内面胴部上端が横、上半が斜め方向のヘラケズリである。色調は、48が内面暗灰褐色～灰褐色、外面灰褐色～黄茶色、49は暗黄茶色である。胎土は48が1mm大の砂粒を少量、49が2mm大の砂粒を多く含む。焼成はどちらも悪い。



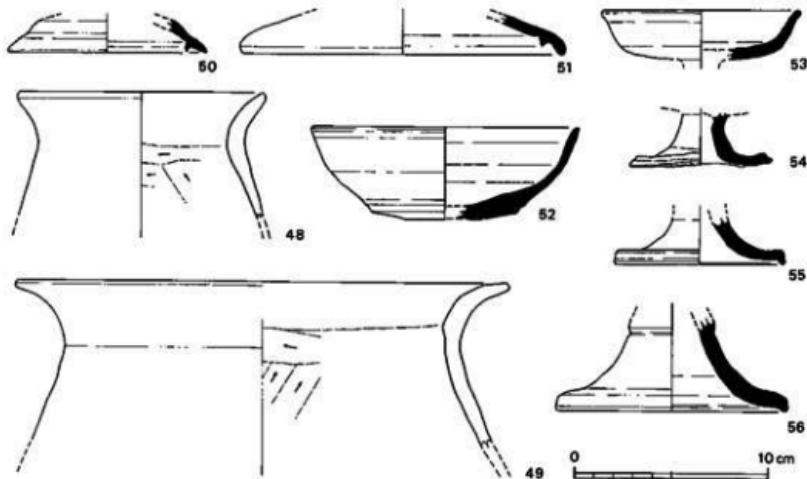
第35図 SB 18実測図 (1 : 60)

須恵器（第36図）

杯蓋（50・51） いずれも口縁部の破片で、復元口径は、50が10.1cm、51が16.4cmである。50は天井部との境が浅くくぼみ、口縁端部が外下方にまっすぐのびる。かえりは細く下方にのびる。調整はロクロナデである。51は口縁部がまっすぐのび端部でやや下方に下がる。かえりは断面三角形状である。調整は内面がロクロナデ、外面は不明である。色調は、50が内面青灰色、外面暗青灰色、51が内外面青灰色で、外面口縁端部だけが黒灰色である。どちらも胎土に微砂粒を少量含み、焼成は良好である。ロクロの回転方向は50が時計回りで、51は不明である。

杯身（52） 底部中央を欠いており、復元口径13.6cm、器高4.8cmである。底部はほぼ平坦で、体部は内湾し口縁端部は外上方にまっすぐのびる。調整は、底部内面が仕上げナデ、底部外面には回転ヘラ切りの痕跡を残す他は内外面ともロクロナデである。色調は内面暗茶灰色、外面淡青灰色である。胎土は1mm大の砂粒を少量含み、焼成は良好である。ロクロの回転方向は時計回りである。

高杯（53～56） 53は杯部、55・56は脚部の破片で、54は杯部を欠いた脚部である。53は復元口径9.9cm、54は脚径7.0cm、55・56は復元脚径で、55が8.4cm、56が11.6cmである。53は杯底部がほぼ平坦で、口縁部は外上方にのび口縁端部がやや外反する。調整は杯部外



第36図 SB18出土遺物実測図（1：3）

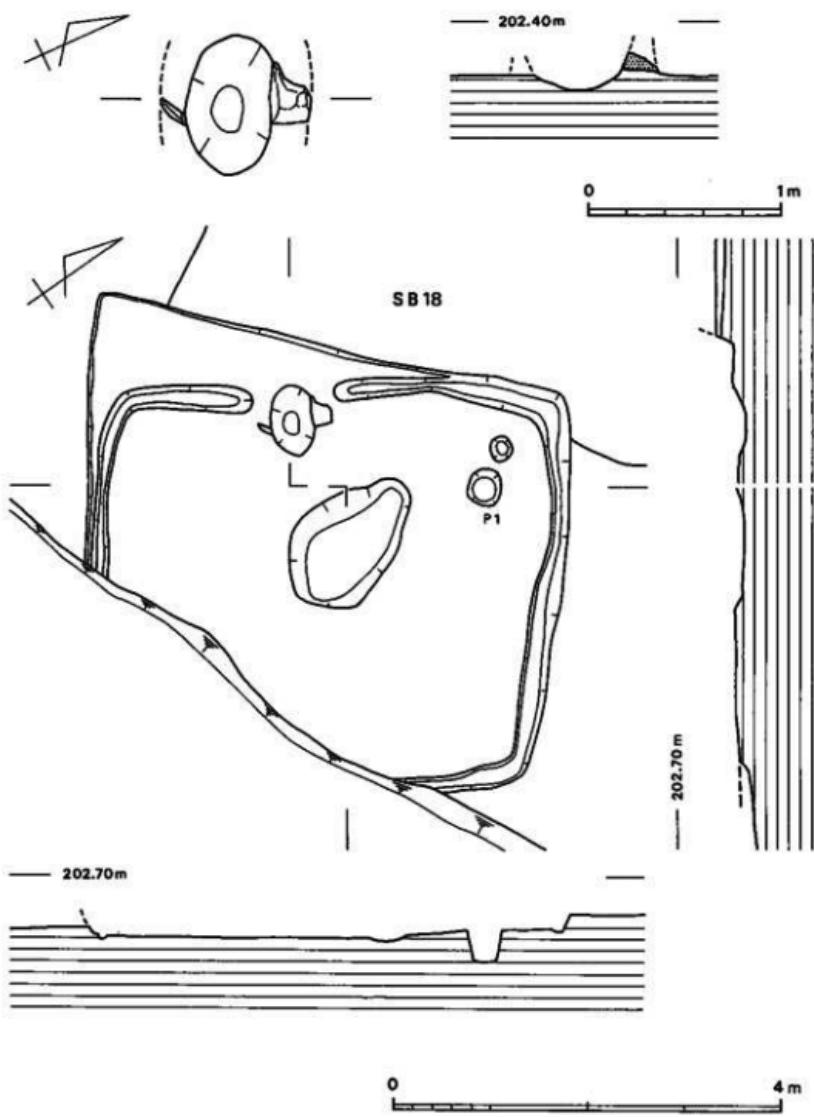
面が雑なナデで他はロクロナデである。54は脚柱部が外下方にまっすぐの脚裾部は大きく外反する。脚端部は外上方に反った後、下方に折れ曲がる。調整はロクロナデである。55は脚裾部が外反し、脚端部を下方に折り曲げている。調整はロクロナデである。56は脚柱部が外下方にのび、脚裾部が外反し、脚端部を下方に引き出す。脚柱部外面に凹線を1条入れており、調整は不明である。色調は、53が内面淡青灰色、外面青灰色、54が青灰色、55が淡青灰色、56が内面灰色、外面灰白色である。胎土は、53が微砂粒を少量、55が多く含み、54・56が0.5mm大の砂粒を多く含む。焼成は53～55が良好で、56は悪い。54・55は焼けひずんでいる。ロクロの回転方向は53～55が時計回りで、56は不明である。53・54は灰カブリである。

S B19（第37図）

S B19は、S B18の南側にある堅穴住居跡で、S B18・26と重複している。平面形は正方形であるが、住居跡西側隅は上端が崩落して外側に広がり、また南側隅は削平されている。規模は4.9×4.2mで、壁高は北側隅で約25cmである。壁面下に壁溝があるが、北西辺中央付近にあるカマドの部分だけは途切れている。幅は20～30cmである。柱穴は1個検出し、規模は径35cm、深さ30cmである。4本柱構造の建物であったと思われるが、他の柱穴は確認できなかった。住居跡床面中央に不整橿円形の土壙がある。規模は1.6×1m、深さ10cmで内部は暗灰褐色土で埋まっている。用途は不明である。カマドは中央に75×45cm、深さ8cmの火床があり、火床の両側には袖がある。袖は黄白色粘土で造っており内面は焼けて茶褐色を呈するが、長さ5～30cm、高さ10cmしか残っていない。遺物は、住居跡埋土から土師器（甕）・須恵器（杯身）の破片が少量出土したが、図示し得なかった。他の遺構との新旧関係は、S B18→S B19→S B26である。

S B20（第38図）

S B20は、S B18から約2m西にある堅穴住居跡であるが、住居跡の大半は調査区外である。平面形は、正方形ないしは長方形で、住居跡の南東・南西隅を確認した。規模は、北東～南西方向が3.5m、北西～南東方向が75cmである。壁高は15cmで、壁溝・柱穴は確認できなかった。遺物は出土しなかった。



第37図 SB 19実測図 (1 : 60, カマドは 1 : 30)

S B21 (第39図)

S B21は、S B18から南西へ3mの位置にある堅穴住居跡で、S B23と重複している。平面形は方形と思われる。住居跡北西側をS B23に切られており当初東側隅の部分だけを検出したが、S B23の床面で検出した溝がS B21の北西辺の壁溝と考えられる。規模は北西～南東方向が約4.1m、北東～南西方向が約2.2mで、壁高は東側隅で10cmである。壁面下の壁溝は、幅25～35cmである。柱穴は確認できず、遺物も出土しなかった。S B23との新旧関係は、S B21→S B23である。

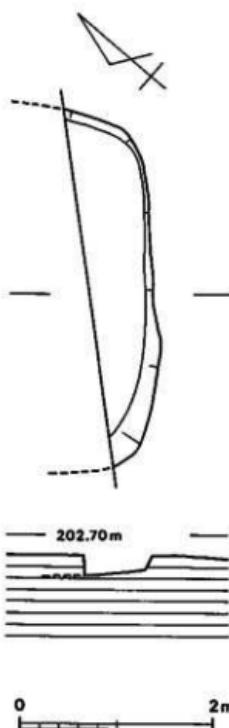
S B22 (第39図)

S B23の北側にある堅穴住居跡で、S B23と重複している。住居跡の北辺だけで東西の隅も確認できなかったが、平面形は方形と思われる。長さは2.9mである。壁高は10cmで、壁面下の壁溝は幅13～30cmである。床面上に径約30cmの焼土面がある。柱穴は確認できなかった。遺物は須恵器(杯蓋)が出土し、59・60は壁溝上の住居跡埋土から出土した。S B23との新旧関係は、S B22→S B23である。

遺物

須恵器 (第40図)

杯蓋 (59・60) 59はほぼ完形で口径12.1cm、器高4.0cmである。60は口縁部～天井部まで残っており復元口径13.4cm、器高4.2cmである。59は天井部が丸く、口縁部との境に丸みを帯びた稜がある。口縁部は外反気味に下方にのび、口縁端部は丸くおさめる。調整は、天井部内面中央に仕上げナデ、天井部外面の上部1/3に回転ヘラケズリ、他はロクロナデを施している。また天井部外面中央に「X」字状のヘラ記号がある。60は天井部が丸みを持ち、口縁部と天井部の境に広く浅いくぼみがある。口縁部は外下方にのび口縁端部は丸くおさめる。調整は天井部内面中央に仕上げナデ、天井部外面の上部1/2に回転ヘラケズリ、他はロクロナデを施している。どちらも色調が青灰色で、胎土に1mm大の砂粒を少量含み、

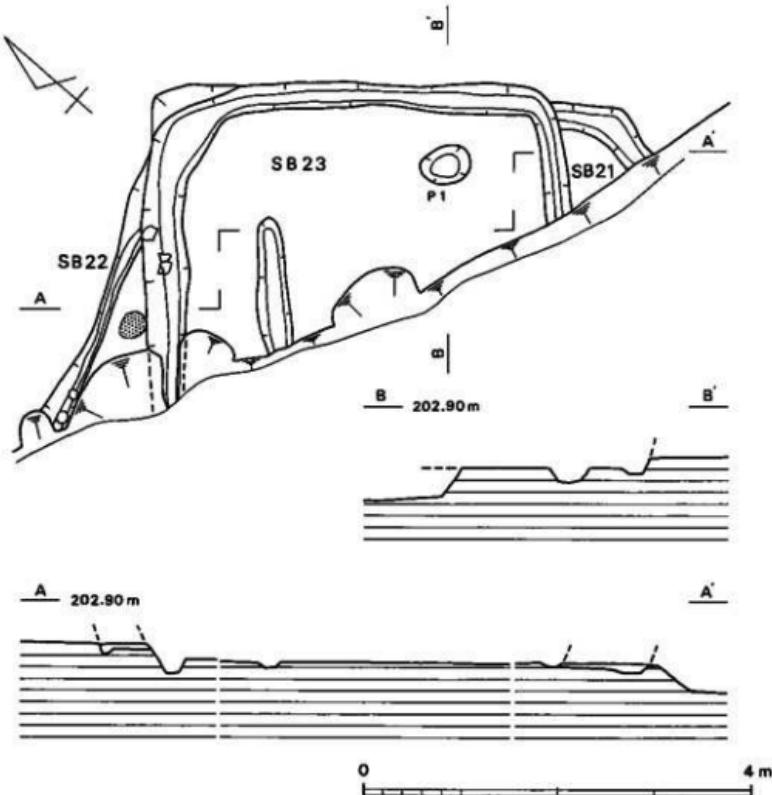


第38図 S B20実測図 (1:60)

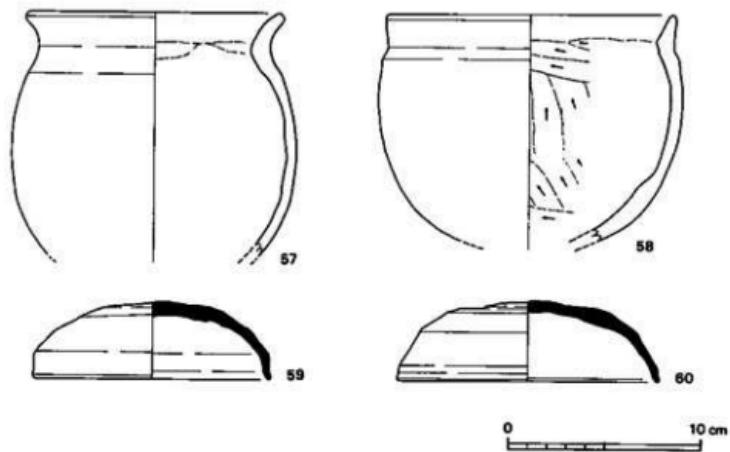
焼成は良好である。ロクロの回転方向は、59は時計回り、60は反時計回りである。

S B23 (第39図)

S B23は、S B21・22と重複した堅穴住居跡である。平面形は隅丸方形で、住居跡の規模は、北西～南東方向が4.4mで、北東～南西方向が3.2mである。壁高は北側隅で約30cmで、壁面下をめぐる壁溝は幅20～40cmである。柱穴は1個で径40cm、深さ15cmである。4本柱の建物と思われるが、他の柱穴は確認できなかった。遺物は土師器（甕・鉢）が出土し、57・58は住居跡埋土から出土した。S B21～23の新旧関係はS B21→S B23、S B22→S B23である。



第39図 S B21～23実測図 (1 : 60) (アミ目は焼土)



第40図 SB22・23出土遺物実測図 (1 : 3)

遺物

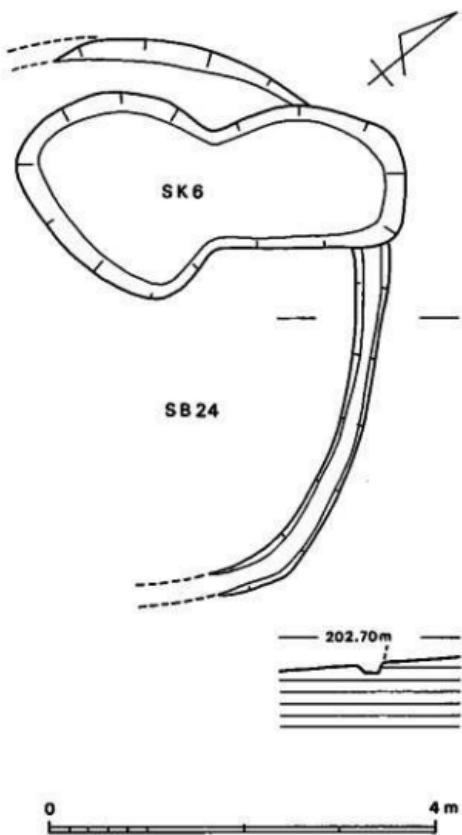
土師器 (第40図)

甕 (57) 口縁部～胴部下半の破片で復元口径は12.9cmである。口縁部は頸部から外上方にやや外反してのび、口縁端部に面を持つ。調整は口縁部外面がヨコナデで、他は不明である。色調は内面が黄茶色、外面が黒褐色である。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成は悪い。

鉢 (58) 口縁部～胴部下半の破片で復元口径は14.6cmである。内面頸部に稜を持ち、口縁部は頸部から外上方にまっすぐのびる。調整は胴部内面上端が横方向、それ以下が縱方向のヘラケズリである。他は調整不明である。色調は内面が暗黄茶色～淡黄茶色、外面が暗黄茶色～灰茶色である。胎土は1mm大の砂粒を少量含み、焼成はやや悪い。

SB24 (第41図)

SB24はSB11から北側約3mにある竪穴住居跡でSK6と重複している。平面形は円形で径は約5.9mである。壁高は北西側で5cmである。壁構は北西側を削平されている。幅は25～35cmである。柱穴は確認できなかった。遺物は図示し得なかったが、住居跡埋土から弥生土器の破片が少量出土した。他の遺構との新旧関係はSB24→SK6である。



第41図 SB24, SK6実測図 (1 : 60)

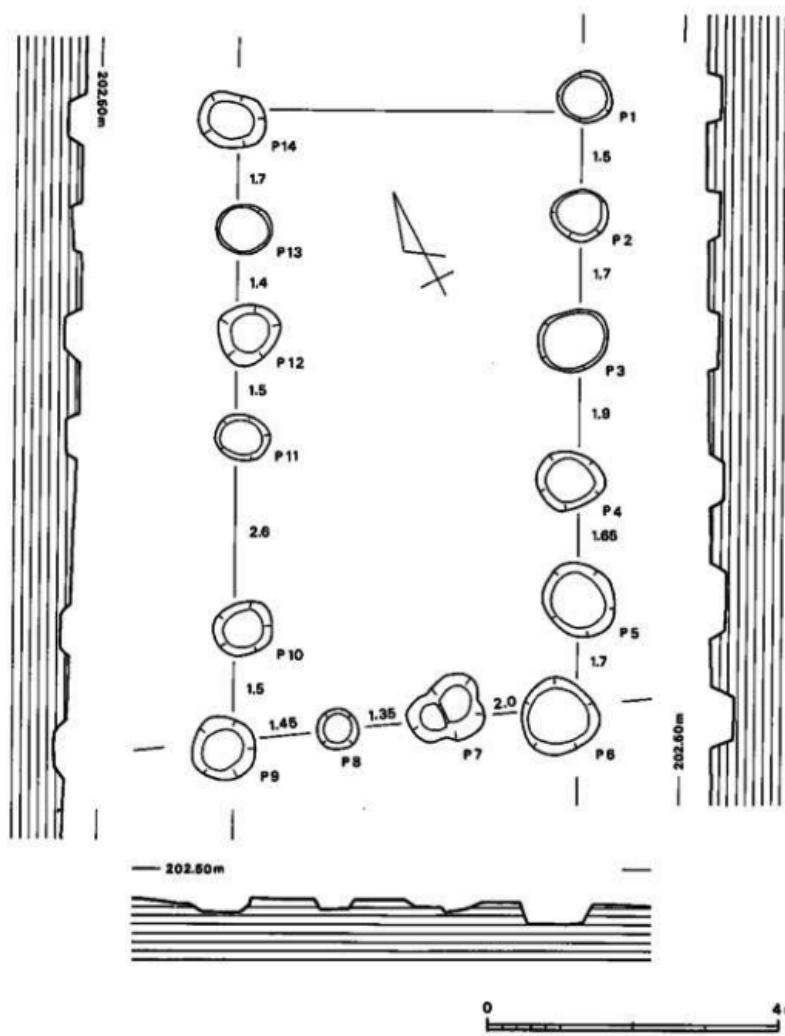
2～P3が2.0m, P5～P8が2.6m～2.0m～1.9mである。P1～P2の間の柱穴は確認できなかった。梁行の柱間はP3～P5が2.25m～1.8m, P8～P1が2.0m～2.0mである。本遺構は調査区外に統く可能性もある。遺物は柱穴内から土師器(甕), 須恵器(杯蓋・杯身), 土師質土器(碗)の破片が少量出土したが, 図示し得なかった。他の遺構との新旧関係はSB18→SB19→SB26である。

SB25 (第42図)

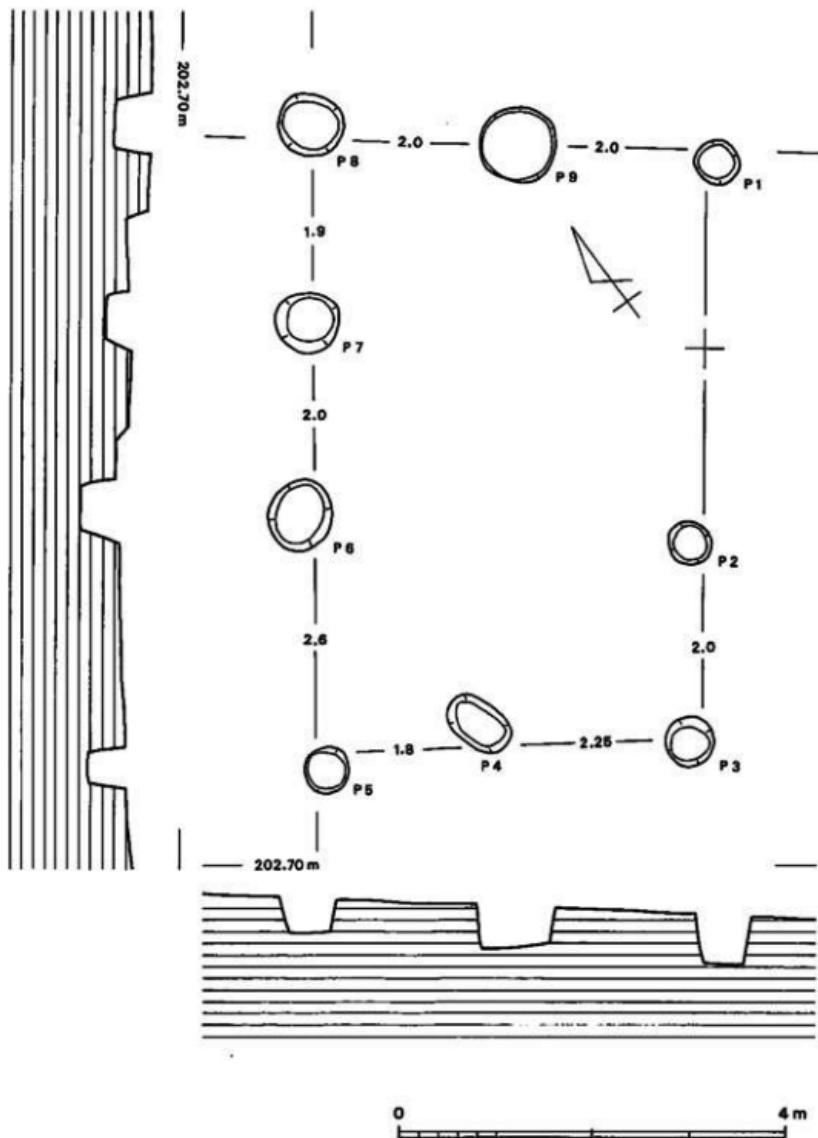
SB25は, 衍行5間(8.45～8.7m)×梁行3間(4.75～4.8m)の掘立柱建物跡でSB10・11と重複している。柱穴は径60～110cm, 深さ10～30cmである。衍行の柱間はP1～P6が1.5m～1.7m～1.9m～1.65m～1.7m, P9～P14が1.5m～2.6m～1.5m～1.4m～1.7mである。梁行の柱間は, P6～P9が2.0m～1.35m～1.45mで, P1～P14の間は検出できなかった。遺物は土師器(甕)・須恵器(杯身)・土師質土器(皿)の破片が少量出土したが, 図示し得なかった。他の遺構との新旧関係はSB10→SB11→SB25である。

SB26 (第43図)

SB26は, 衍行3間(6.1～6.5m)×梁行2間(4.0～4.05m)の掘立柱建物跡で, SB18・19と重複している。柱穴は径45cm～70cm, 深さ15cm～60cmである。衍行の柱間はP



第42図 SB25実測図 (1 : 80)



第43図 S B26実測図 (1 : 60)

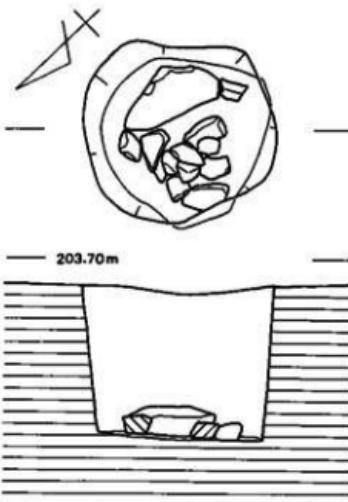
土壤

SK 3 (第20図)

SK 3はSB 9と重複した土壤で、平面形は橢円形である。規模は $1.4 \times 0.8\text{m}$ 、深さ45cmである。遺物は出土せず、SB 9との新旧関係はSB 9→SK 3である。

SK 4 (第20図)

SK 4はSB 7と重複した土壤である。平面形は橢円形で、土壤の東半分は調査区外にかかり、規模は南北80cm、東西35cm、深さ25cmである。遺物は出土せず、SB 7との新旧関係はSB 7→SK 4である。



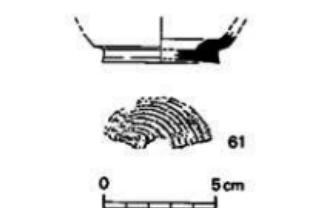
SK 5 (第46図)

SK 5はSB 9とSB 24のほぼ中間に位置する土壤である。平面形は不整形で規模は $3.0 \times 1.4\text{m}$ 、深さ50cmである。遺物は出土せず、遺構の性格も不明である。

SK 6 (第41図)

SK 6はSB 24と重複した土壤である。平面形は不整形で、規模は $4.0 \times 2.1\text{m}$ 、深さ20cmである。遺物は出土せず、SB 24との新旧関係はSB 24→SK 6である。

第44図 SK 7実測図 (1 : 30)



SK 7 (第44図)

SK 7はSB 5から約5m南西に位置する土壤である。平面形は不整形で規模は $100 \times 90\text{cm}$ 、

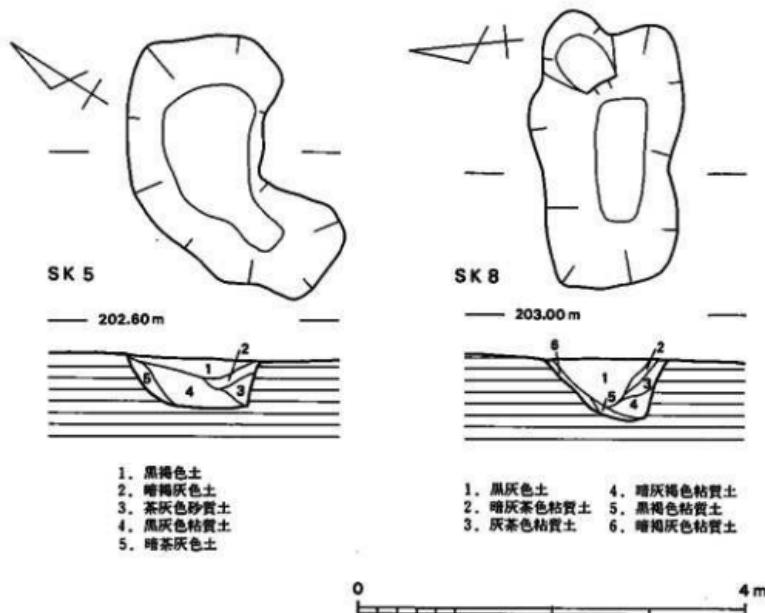
第45図 SK 7出土遺物実測図 (1 : 3)

深さ80cmである。底面に厚さ約10cmの角礫が十数個あり、上面がほぼ同じ高さになるよう揃えている。掘り下げたところ、礫面の直上では黒褐色土が怪約70cmのはば正円形に堆積していた。桶が置かれていたと思われるが遺構の性格は不明である。遺物は土師器(甕)・須恵器(杯身)・土師質土器(皿)・須恵質土器(碗)・青磁(碗)の破片が少量出土した。61は土壌埋土上層から出土した。

遺物

須恵質土器(第45図)

碗(61) 底部の破片で、復元底径は5.2cmである。底部から体部への境は内側に屈曲し、口縁部はまっすぐのびる。調整は内面と体部外面がロクロナデ、底部外面には回転糸切り痕が残る。色調は内面が淡青灰色、外面が青灰色である。胎土は0.5~2mmの大砂粒を少量含む。焼成は良好で、ロクロの回転方向は時計回りである。



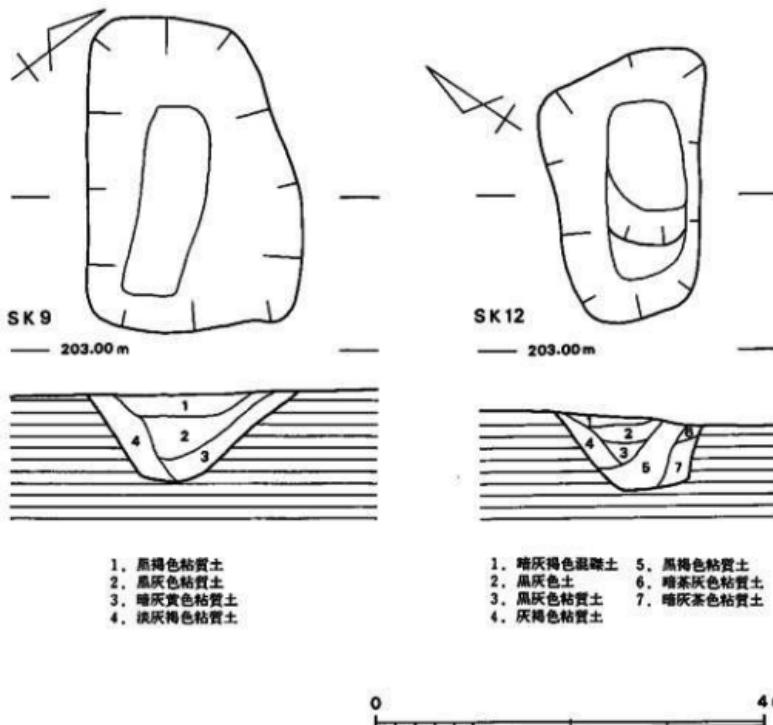
第46図 SK 5・8実測図 (1:60)

SK 8 (第46図)

SK 8はSK 7から南西約3mにある土壌で、SK 9と隣接している。平面形は不整な長方形で、断面は逆台形である。規模は $2.6 \times 1.3\text{m}$ 、深さ65cmである。遺物は出土せず遺構の性格も不明である。

SK 9 (第47図)

SK 9はSK 8の南西側に隣接する土壌である。平面形は隅丸方形で、断面は逆台形である。規模は $3.25 \times 2.2\text{m}$ 、深さ90cmである。遺物は出土せず遺構の性格も不明である。



第47図 SK 9・12実測図 (1 : 60)

S K10 (第25図)

S K10はS B12と重複した土壙である。平面形は橢円形で規模は 1.5×0.9 m、深さ60cmである。遺物は出土せず遺構の性格も不明である。他の遺構との新旧関係はS B12→S K10である。

S K11 (第25図)

S K11はS B12と重複した土壙である。平面形は長方形で土壙の南東側は削平されている。規模は南北1.0m、東西1.0m、深さ25cmである。遺物は出土せず遺構の性格も不明である。他の遺構との新旧関係はS B12→S K11である。

S K12 (第47図)

S K12はS B16と重複した土壙である。平面形は隅の丸い長方形で底面は2段になっている。規模は 2.7×1.5 m、深さは40cmと75cmである。遺物は出土せず、遺構の性格も不明である。他の遺構との新旧関係はS B16→S K12である。

柱穴出土の遺物 (第48図)

建物を組めなかった柱穴からも土師器などの破片が出土している。

土師器

壺(62) P 4から出土した頸部～底部の破片で、復元頸部径は8.6cmである。最大胴径の部分が頸部直下で、底部中央は尖り気味である。調整は内面頸部～胴部上半がヘラ状工具によるヨコナデで、それ以下が横方向のヘラケズリである。外面は胴部上半が調整不明であるが、胴部下半～底部には斜め方向のハケ目が残る。色調は乳褐色で、一部に黒斑がある。胎土は0.5～1mm大の砂粒を多く含み、焼成はやや悪い。

白磁

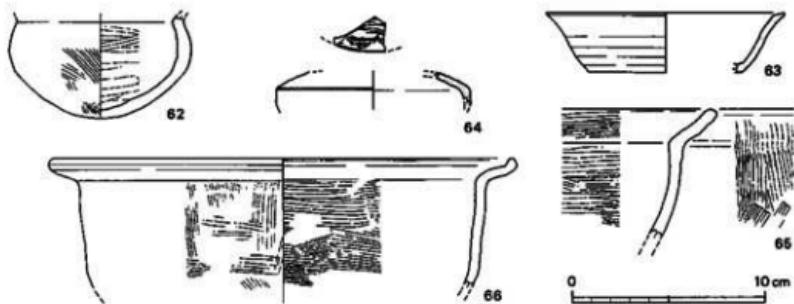
合子(64) P 2から出土した蓋である。天井部～口縁部の破片で推定口径約9.5cmである。天井部は丸みを持ち、口縁部はほぼ垂直である。外面に草花文と思われる印花文を施し、全面に施釉している。内面天井部は施釉するが口縁部にかけて剥き取っている。色調

は磁胎が乳灰色、釉が淡緑灰色の透明釉である。胎土はやや荒く、焼成は良好である。内外面に粗い貫入が入っている。

皿(63) P 1から出土した口縁部の破片で、復元口径は12.3cmである。口縁部は底部端部から外上方にのびるが、口縁端部は外反し開いている。調整は口縁部下半に回転ヘラケズリを施している。全面に施釉するが口縁端部は釉を垂き取っている。色調は素地が淡灰茶色で、釉が淡乳青色である。胎土は堅緻で、焼成は良好である。

土師質土器

鍋(65・66) 65はP 5から、66はP 3から出土し、どちらも口縁部～体部の破片である。復元口径は66が23.7cmである。65は体部が内湾して立ち上がり、口縁部は頸部から外上方にまっすぐのびる。66は体部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は頸部から水平に近い角度でのびた後口縁端部を真上に引き上げている。調整は65が、内面に横方向のハケ目、外面に縦方向のハケ目が残る。66は、体部内面に横方向のハケ目、体部外面に縦方向のハケ目が残り、外面の体部下半には一部に横方向のハケ目もみられる。口縁部は横方向のナデを施す。色調は65が内面暗黄茶色、外面暗褐色で外面と内面口縁部にススが付着している。66は内面淡灰黄色、外面灰褐色で、外面にススが付着している。胎土は65が1mm大の砂粒を少量含み、66が微砂粒を多く含む。焼成はともに良好である。



第48図 ピット1～5出土遺物実測図(1:3)

調査区出土の遺物（第49・50図、図版23・24）

包含層や旧河川からも遺物が出土している。弥生土器（壺）、須恵器（杯蓋・杯身・杯・椀）、須恵質土器（鍋）、白磁（椀・合子）、青磁（椀）、龜山焼（甕）、瓦質土器（鍋）、土師質土器（皿）、石器（石鎌）、石製品（砥石・石鍋）、ガラス小玉などである。67～75、77～83・86・90・91が包含層、92が旧河川の堆積土から出土した。76・84・85は表面採集である。

弥生土器

壺（92） 口縁部～体部上半の破片で、復元口径9.0cmである。口縁部は外上方にまっすぐのび、口縁端部に面を持つ。頸部は短く、体部は内湾する。調整は、内面口縁部～頸部がヨコナデ、体部が横方向のヘラケズリ、外面口縁部がヨコナデ、頸部が櫛による粗いヨコナデ、体部が横方向のヘラミガキである。外面体部には7本単位の波状文を施す。色調は灰褐色～暗灰茶色である。胎土は0.5～3mm大の砂粒を多く含み、焼成は良好である。

須恵器

杯蓋（67） 口縁部～天井部が残っており口径は11.6cmである。天井部は丸く口縁部との境は浅くくぼむ。口縁部は外反し口縁端部に面を持つ。調整は内面と外面天井部下半以下がロクロナデ、外面天井部が回転ヘラ切り後未調整である。外面天井部の一部には一方向ナデがある。色調は内面が暗褐色、外面が暗褐色～暗青灰色である。断面は中心部が暗青灰色で器表近くが暗褐色である。胎土は1mm大の砂粒を少量含み、焼成は良好である。ロクロの回転方向は時計回りである。

杯身（68） 底部中央を欠く破片で復元口径13.0cmである。底部はやや丸みを持ち受部にむけて外上方にまっすぐのびる。受部はほぼ水平で、口縁部は内傾して立ち上がる。口縁部外面には、杯蓋の口縁端部が焼きついている。調整は内面がロクロナデ、外面は全面灰カブリで不明である。色調は淡青灰色で、外面には暗灰緑色の自然釉が付着している。胎土は微砂粒を多く含み、焼成は良好である。ロクロの回転方向は時計回りである。

杯（69） 完形で口径11.5cm、器高3.9cmである。底部中央がややふくらみ、口縁部は外上方にまっすぐのびる。口縁端部は肥厚し丸くおさめる。調整は、底部外面が回転ヘラ切り離し後雜なナデで、他はロクロナデである。色調は淡青灰色～青灰色で、胎土は1mm大の砂粒を少量含む。焼成は良好で、ロクロ回転方向は時計回りである。

椀（70・90） どちらも底部の破片である。70は復元高台径8.9cm、90は高台径7.0cmである。70は底部が丸みを持ち、高台が外下方にまっすぐのびる。調整は内面底部中央が一方向ナデ、それ以上がロクロナデである。外面は底部が回転ヘラ切り離し後未調整、高台

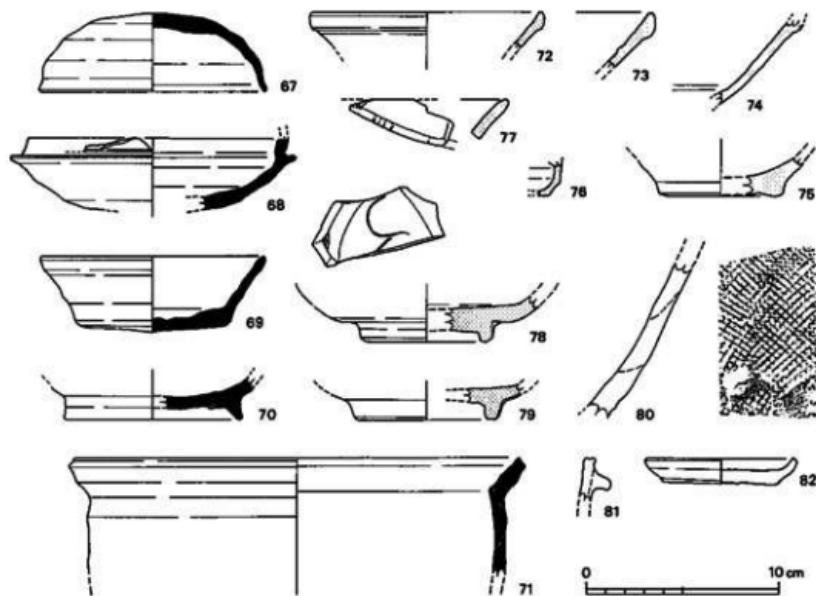
部が張り付け後ヨコナデである。90は底部が平坦で、高台は下方にまっすぐのびる。調整は内面と外面体部がロクロナデ、高台部が張り付け後ヨコナデである。外面底部は回転糸切り後未調整である。どちらも色調が灰色で、胎土に1mm大の砂粒を少量含む。焼成は良好で、ロクロの回転方向は時計回りである。

須恵質土器

鍋 (71) 口縁部～体部上半の破片で、復元口径は23.0cmである。体部はやや内湾し、口縁部は外上方にまっすぐのびる。口縁端部には面を持つ。断面には粘土紐の巻き上げ痕跡が顕著である。調整は体部内面がヨコナデ、体部外面が雑なナデ、口縁部がヨコナデである。色調は淡青灰色で、胎土は0.5mm大の砂粒を少量含む。焼成は良好である。

白磁

椀 (72～75) 72～74が口縁部～体部の破片で、75が体部下半～底部の破片である。復元口径は72が11.8cm、75が6.4cmである。72～74は体部から口縁部へまっすぐのび、口縁部は折り返し玉縁にしている。75は幅の広い高台を削り出しているがみこみ部分は低い。調整は72～74が内面と外面口縁部にロクロナデ、外面に回転ヘラケズリを施し、全面に施釉する。74は内面体部下半にヘラ描き沈線を一条入れる。75は内面が全面施釉のため調整不



第48図 F区出土遺物実測図 (1) (1 : 3)

明、外面が回転ヘラケズリ後高台内側にヨコナデを施す。外面の施釉は体部下端までで、それ以下は露胎である。色調は、素地はいずれも灰白色である。釉は、72・74が乳緑灰色の透明釉、73・75が乳灰色である。胎土はいずれも頸織で、焼成は良好である。ロクロの回転方向は74が時計回りで、他は不明である。73・74には空隙がみられる。

合子（76） 身部の破片で、径は不明である。底部は平坦で、体部は外上方にのびるが途中からはほぼ垂直に立ち上がる。受部は内面に下端が残っているが、内傾している。型による成形で調整は不明である。内面と外面体部まで施釉する。色調は素地が乳灰色、釉が乳青灰色である。胎土は頸織で、焼成は良好である。貫入が入る。

青磁

椀（77～79） 77は口縁部、78・79は底部の破片で、復元底径は78が6.9cm、79が7.5cmである。77は口縁部がわずかに外反し口縁端部を丸くおさめる。体部以下を欠失しているが、割れ口の断面を丁寧に磨いている。割れた個体を修復して再利用していたと思われる。78は外面底部は直線的に削り高台端部を斜めに切り面を造る。内面に草花文と思われる文様を施している。79は高台外側を斜めに削る。色調は、素地が77・78は灰色、79は暗灰色で、釉が77は灰緑色、78・79は暗緑色である。胎土は77が微砂粒を少量含み、78・79が頸織である。焼成はいずれも良好で、ロクロの回転方向は78が反時計回りで、他が不明である。貫入が77・79にあり、77は細かく79は粗い。

備前焼

甕（91） 口縁部～体部上端の破片である。口縁部は玉縁で、頸部は垂直に立ち上がる。調整はヨコナデで、色調は暗灰色である。胎土は微砂粒を多く含み、焼成は良好である。

亀山焼

甕（80） 脊部下半の破片で、粘土紐の巻き上げ痕跡が顕著である。調整は内面が不明で、外面に格子目状の叩きを施している。色調は内面が灰褐色、外面が黒褐色である。胎土は0.5mm大の砂粒を少量含み、焼成は良好である。

瓦質土器

鍋（81） 口縁部の破片である。口縁端部は面をなし、鋤はやや下方にのびる。調整はヨコナデで、色調は黒褐色である。胎土は微砂粒を少量含み、焼成は悪い。

土師質土器

皿（82） ほぼ完形で、口径7.7cm、器高1.3cmである。底部はほぼ平坦で、口縁部は内湾し口縁端部を丸くおさめる。調整は底部外面が回転ヘラ切り後未調整で、他は不明である。色調は黄茶色で、胎土は0.5mm大の砂粒を少量含む。焼成は悪い。

石器

石鎌 (83・84) 83は一部欠失しており、現存長1.4cm、現存幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ0.5g。石質はガラス質凝灰岩である。84は先端をわずかに欠失する。現存長2.4cm、幅2.0cm、厚さ0.4cm、重さ1.2g。石質は安山岩質凝灰岩である。

石製品

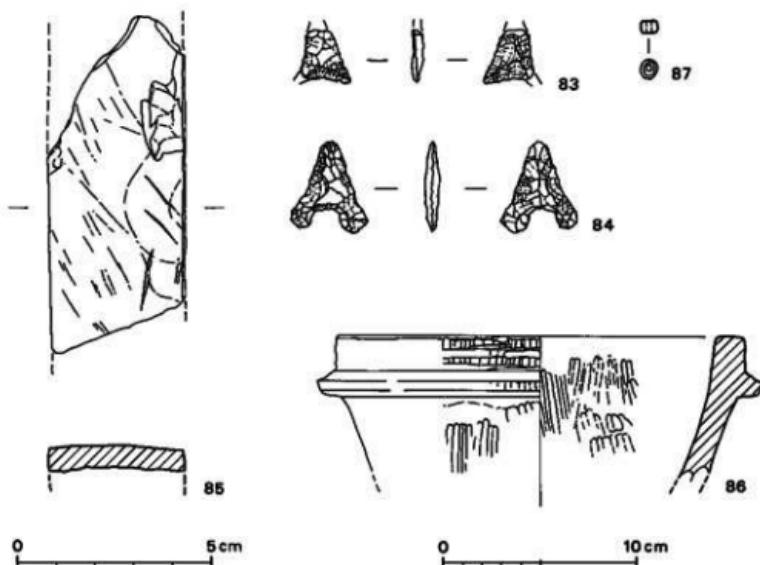
砥石(85) 両端と下面を欠失する。現存する3面とも細かい擦痕が残る。現存長8.6cm、幅3.5cm、現存厚0.7cm、重さ31.1g。石質は流紋岩質凝灰岩である。

石鍋(86) 口縁部～体部上半の破片で、復元口径20.6cmである。体部は内湾気味で、鋸は外下方にのびる。調整は鋸の上下面が横方向のケズリで他は縦方向のケズリである。鋸上端～口縁端部が縦方向のケズリ後粗い横方向のケズリを施す。石質は滑石である。

この他に、黒曜石・流紋岩質凝灰岩などのチップが出土している。

ガラス小玉 (87)

径4.5mm、厚さ3.0mm、孔径1.0mm、重さ0.1gである。色調は暗青色である。



第58図 F区出土遺物実測図 (2) (83~85・87は2:3, 86は1:3)

第V章　まとめ

今回の発掘調査の結果、6か所に設定した調査区でそれぞれ遺構を検出した。特に調査面積の広いF区では竪穴住居跡など多くの遺構を確認した。ここではF区を中心として調査の成果を述べ、まとめとしたい。

遺構について

本遺跡で検出した遺構は、棚1条、竪穴住居跡21軒、掘立柱建物跡6棟、溝1条、土壙12基、祭祀遺構1基、柱穴多数である。SB1~4はいずれも一間四方の掘立柱建物跡であるが、調査区外にのびていた可能性もある。時期は不明である。SD1は、北西から南西方向に流れていた溝である。SD1ののびる南西方向にはF区で検出した旧河川の上流域があると思われ、SD1はそれに流れ込んでいた可能性もある。時期は不明である。SK1は、組合式木棺を埋納した墓であるが、時期は不明である。SX1は、土壙の底面に木の枝を入れ、その上に土師質土器の鍋を伏せて被せていました。地鎮に関連する遺構と思われ、時期は中世である。

調査面積の最も広いF区では多くの遺構を検出した。特に住居跡は、竪穴住居跡を21軒(SB5~24)、掘立柱建物跡を2棟(SB25・26)確認した。竪穴住居跡のうち、平面形が方形の住居跡(SB5~23)は、規模や向きで分類することができる。まず住居跡の規模は、4.9~5.85m×4.2~5.1mの大きい一群(SB9・10・12・17~19・23)と、2.8~4.7m×3.3~3.8mの小さい一群(SB5・6・1・6・2・11・13~16・20)の2種類がある。SB7・8・21・22は不明である。また住居跡の向きは、柱穴を確認していない住居跡が多いため全て掘り方の方位で判断した。その結果、N30°Wを中心とした一群が3軒(SB10・12・18)、N45°Wを中心とした一群が5軒(SB5・11・14・16・19・23)、N60°Wを中心とした一群が4軒(SB6・2・9・13・17)と3種類に分かれた。SB15は、N84°Wでいずれにも含まれない。SB6・1・7・8・20~22は不明である。住居跡の向きは、概ね15°ずつずれている。以上2種類の分類の結果、住居跡の規模で大小2種類、住居跡の向きで3種類にわかれ、規則性があることがわかった。住居跡床面から遺物が出土し、ほぼ住居跡の時期が推定できるのはSB10・11・17のみで、SB10が6世紀後半、SB11・17が7世紀前半である。この他の住居跡の時期は、遺構の新旧関係などからSB6・1・7・8・14~16・22が6世紀後半、SB6・2・9・13・18・19・23が7世紀前半と考え

られる。住居跡の規則性の要因は明らかではないが、同時期に建てられた住居跡はほぼ大きさや向きを揃えていること、また時期が新しくなるにつれて住居跡の規模が小さくなることが窺える。SB24は、平面形が円形で、埋土から弥生土器も出土していることから、弥生時代の住居跡の可能性がある。SB25・26は柱穴埋土から土師質土器（皿・椀）が出士していることから中世と考えられる。

遺物について

各調査区で遺構を検出したが、概して遺物の量は少ない。弥生土器・土師器・須恵器・須恵質土器・土師質土器・瓦質土器・青磁・白磁・亀山焼・備前焼などの土器の他、石器・石製品・鉄器・土製品・ガラス小玉が出土した。今回出土した遺物の中で最も古いものは弥生土器であるが、断片のため詳細は不明である。土師器・須恵器は6世紀後半～7世紀前半が大半であるが、一部住居跡埋土出土のものに、7世紀後半のものがある。その中で土師器甕は、従来から指摘されているように、胴部が丸いものから長胴のものへと変化していくことが窺えた¹¹⁾。須恵質土器は不明である。土師質土器・瓦質土器・亀山焼は中世である。備前焼は15世紀に比定できる。この他、青磁は13～14世紀、白磁は12世紀代である。F区のSB9埋土から出土した縁羽口は、調査区内では確認できなかったが、遺跡周辺に製鉄・鍛冶に関連する遺構が存在する可能性を示唆するものである。

SB11の埋土から出土した紡錘車は、環体斜面や裏面に鋸歯文がめぐり、鋸歯文内には斜格子を施している。県内では若屋古墳¹²⁾、成安第4号古墳¹³⁾、法恩寺南古墳¹⁴⁾、植松第3号古墳¹⁵⁾などから同様の紡錘車が出土しているが、現在までのところ住居跡・集落跡からは出土していない。土製あるいは滑石製で無文の紡錘車は集落跡から多く出土していることから、有文の紡錘車は無文のものとは性格が異なると考えられる。この点で本遺跡での出土は特異な例であると言える。

以上述べたように、本遺跡では弥生時代から中世までの遺構を検出した。弥生時代には住居はあったが、一時的なものであったと思われる。古墳時代後期になって初めて本格的な集落を形成するにいたったと考えられる。戸島川流域には、この時期の特徴的な横穴式石室が多く存在することが知られている。法恩寺南古墳や谷上第1号古墳では、石室床面に須恵器を敷いた状態が検出されている。床面に須恵器や石を敷く構造の古墳は、戸島川流域や上下川流域などの内陸部を中心に分布しており、本遺跡を営んだ人々と、こういった構造を持つ古墳とには密接な関係があると考えられる。このことは、本遺跡出土の紡錘車と同様のものが法恩寺南古墳から出土していることからも想定できる。この他に、住居

跡の向きや規模の分類の結果、住居を建てる際に、住居の大きさや向きに規則性を持たせていたことが窺えた。また中世には、遺跡周辺に長見山城・釜ヶ城などの山城が造られ、本遺跡の近辺には長見山城主である渡辺氏の屋敷があったとの言い伝えもある。本遺跡で検出した掘立柱建物跡や柱穴は、これらの城や屋敷とほぼ同時期と思われ、これらの遺跡と何らかの関連があるものと考えられる。

本遺跡の調査は、調査面積に制約があり遺跡の全貌を明らかにすることはできなかったが、当地域で初めての集落跡の発掘調査であり、古墳時代の集落や中世の建物の様相の一端が明らかとなった。今後の調査例の増加に期待するところである。

註

- (1) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『境ヶ谷遺跡群』昭和58(1983)年
- (2) 高田郡高宮町『高宮町史』昭和51(1976)年
- (3) 広島市『新修広島市史』第1巻 昭和36(1961)年
- (4) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『法恩寺南古墳』昭和59(1984)年
- (5) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『植松第3号古墳』『植松遺跡群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第58集 昭和62(1987)年



①内長見遺跡空中写真（南東から）



②同上（南西から）



①内長見遺跡遠景（南東から）



②A区全景（南東から）



③同左（北東から）



①SK 1 検出状況（北東から）



②同上完掘（北東から）



① S X 1周辺遺構（南西から）



② S X 1検出状況（南東から）



③ 同左完掘（南東から）



①B区全景（北西から）



②SA1, SB1・2（西から）



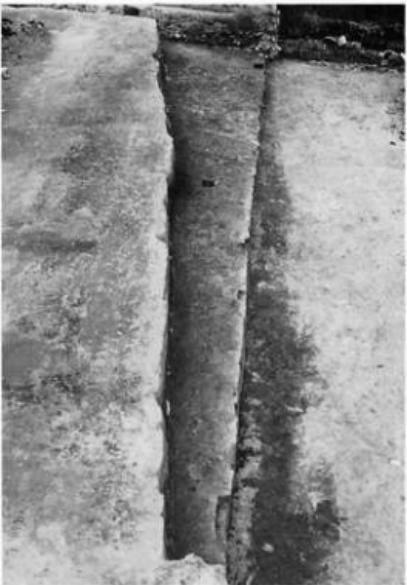
① S D 1 (南から)



② C区全景 (南東から)



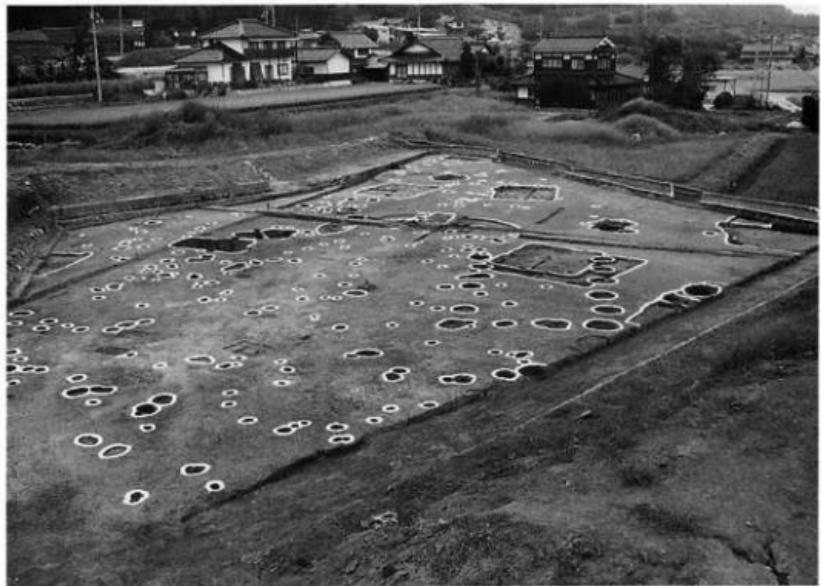
①D区全景（南東から）



②同左（南西から）



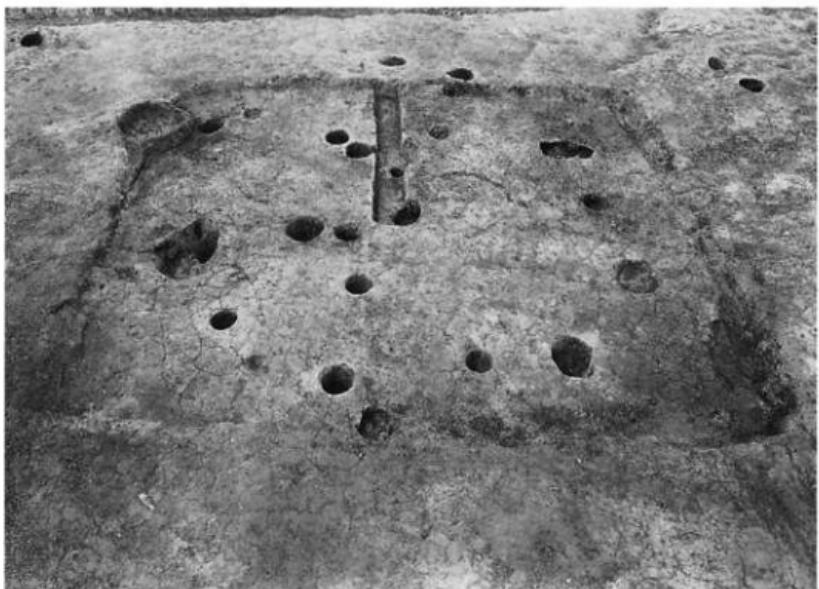
③E区全景（北西から）



① F区全景（南から）



② 同上。（南東から）



①SB 5 (南東から)



②SB 6 (南東から)



①S B 7～9, SK 3 (南東から)



②S B 9 遺物出土状況 (南東から)



①S B10・11（南東から）



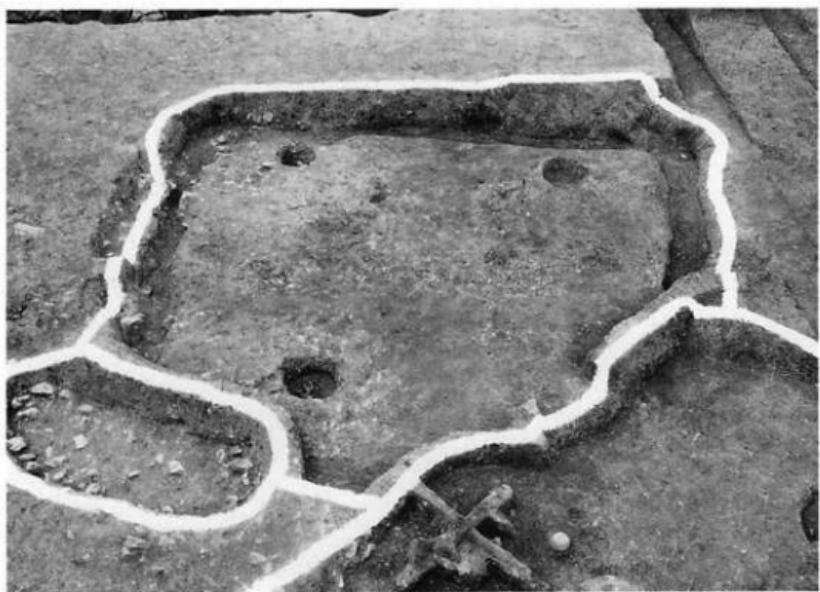
②S B10遺物出土状況（西から）



①S B12, SK10・11 (南から)



②S B13 (南東から)



①SB14 (南東から)



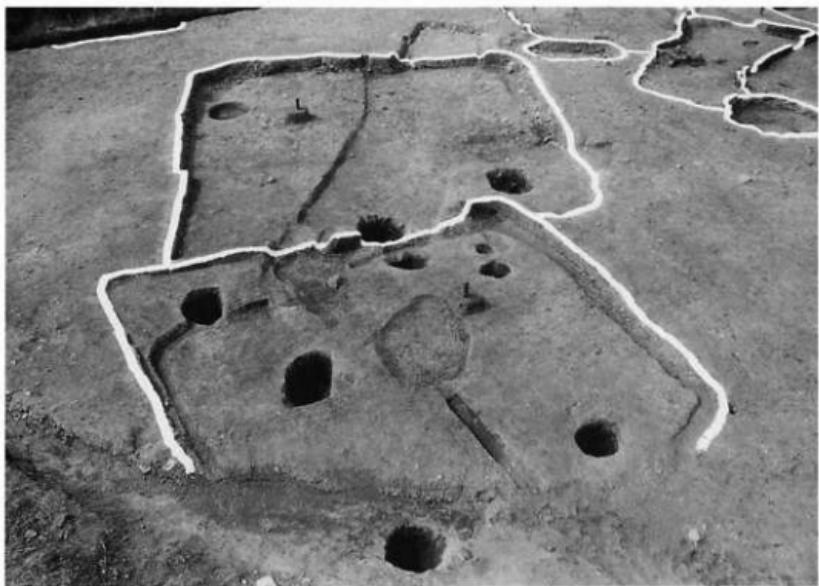
②SB15 (東から)



①SB16(南東から)



②SB17(南東から)



①SB18・19（南東から）



②SB18遺物出土状況（南東から）



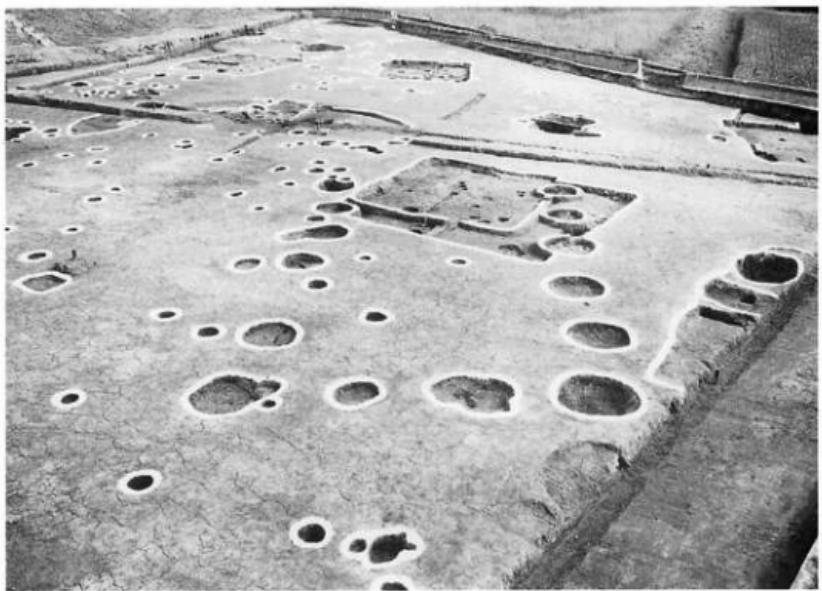
①S B21~23（南西から）



②S B22遺物出土状況（南西から）



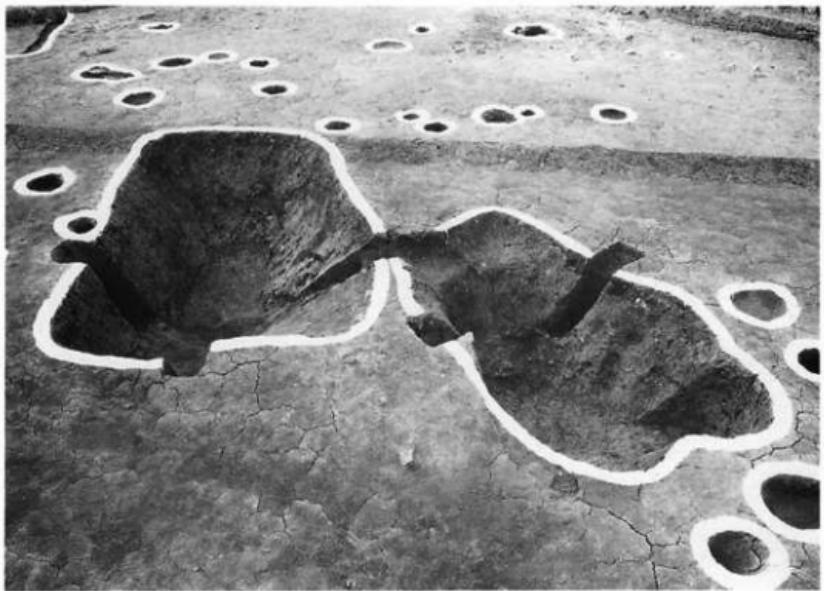
③S B23遺物出土状況（南東から）



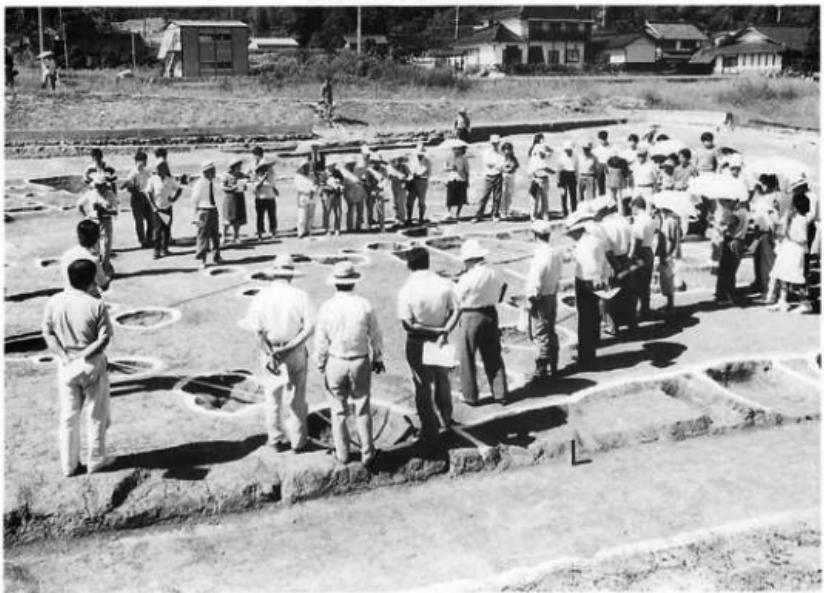
① S B25 (南西から)



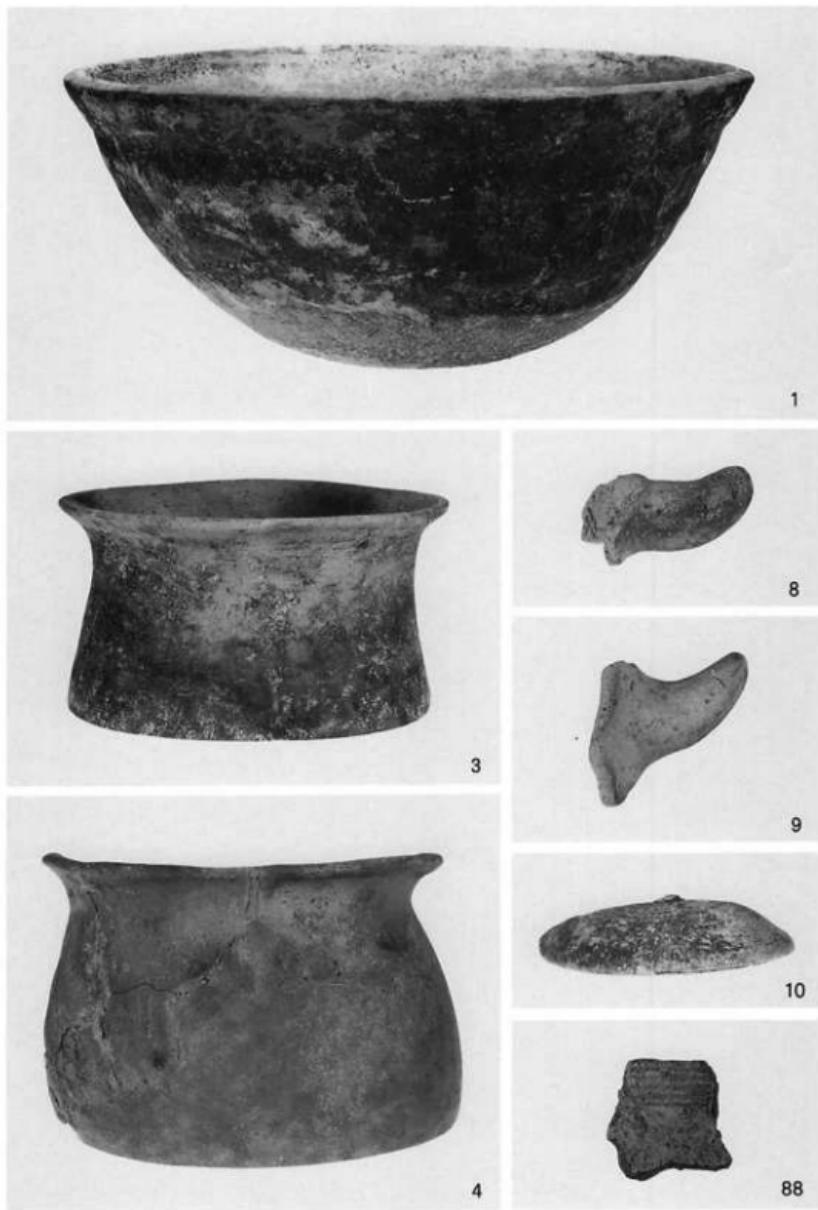
② S B26 (西から)



①SK8・9（南東から）



②現地見学会風景



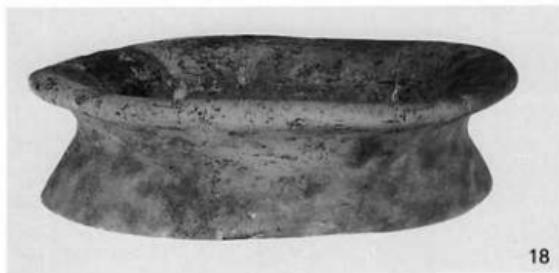
出土遺物（1）



15



16



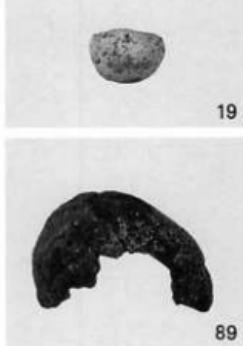
18



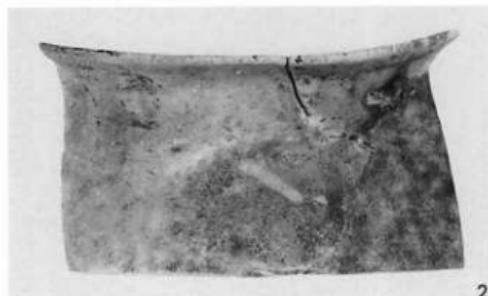
12



14



19



23



25



28



29



30



31



32



33



34



35

出土遺物（3）



37



38



39



44



52



47



49



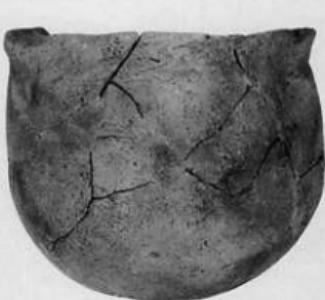
54



55



57



58



59



60



62



67



66



69



63

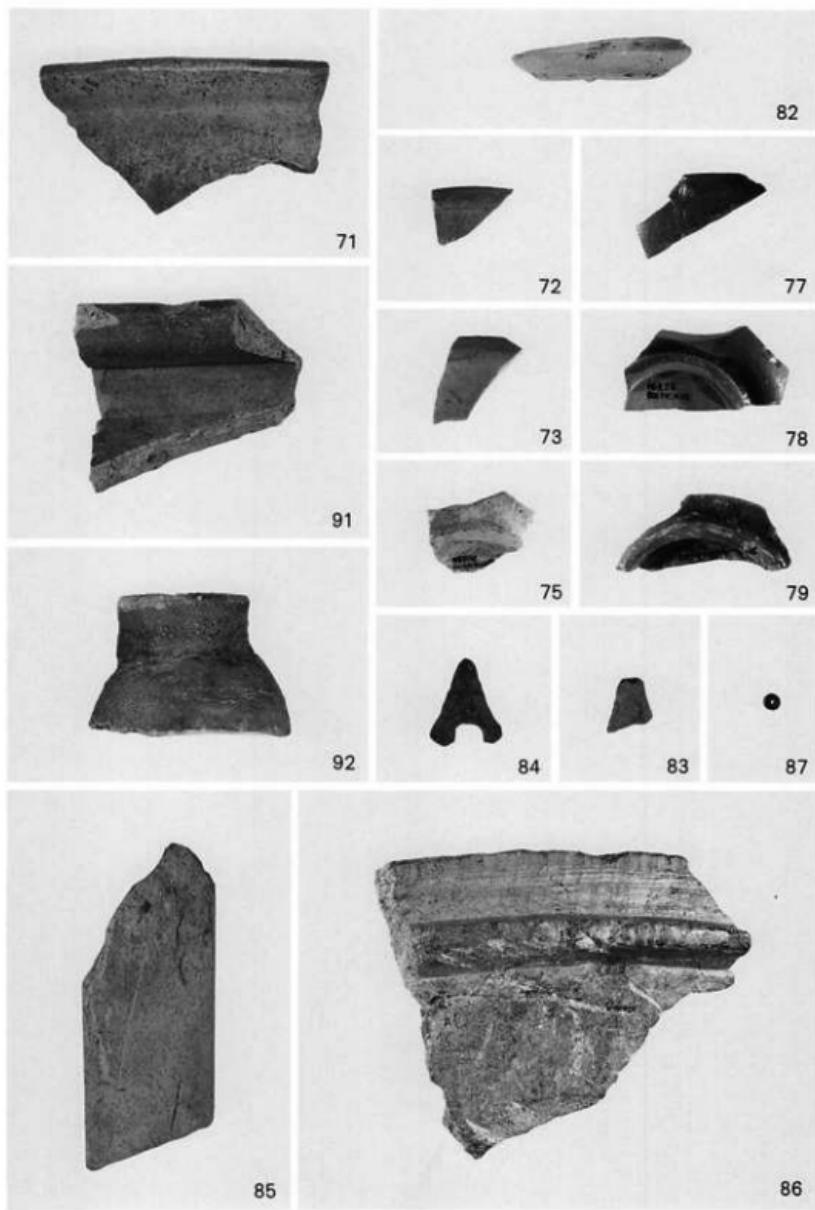


64



90

出土遺物（5）



出土遺物（6）

文 献 デ 一 タ

書名	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第100集 内長見遺跡
執筆者	大上裕士
遺跡名	内長見遺跡
読み	ウチナガミ
所在地	広島県高田郡甲田町大字下小原
種別	集落・墓・祭祀
時代	古墳・中世・不明

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第100集

内 長 見 遺 跡

発 行 平成4(1992)年3月

編集・発行 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター

〒733 広島市西区観音新町4丁目8番49号

TEL (082) 295-5751

印 刷 所 株式会社 中 本 本 店

〒730 広島市中区東白島町13-15

TEL 代表 (082) 221-9181